



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

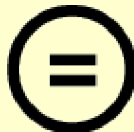
다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

教育學碩士 學位論文

複合動詞「Vつく」「Vつける」の 意味用法について



2010年 8月

釜慶大學校 教育大學院

日語教育專攻

蔡 善 榮



教育學碩士 學位論文

複合動詞「Vつく」「Vつける」の 意味用法について

指導教授 崔 建 植

本論文を教育學碩士學位論文として提出する。



2010年 8月

釜慶大學校 教育大學院

日語教育專攻

蔡 善 榮

蔡善榮の教育學碩士學位論文を認准する。

2010年 8月 25日



主審 文学博士 張 相 彦 (印)

委員 文学博士 孫 東 周 (印)

委員 文学博士 崔 建 植 (印)

目次

1.はじめに.....	1
1.1.研究目的.....	2
1.2.研究方法.....	3
2.先行研究概観.....	4
2.1.複合動詞と格関係に関する先行研究.....	5
2.2.複合動詞「Vつく」「Vつける」の先行研究.....	9
2.3.先行研究の問題点.....	11
3.本動詞としての「つく」「つける」.....	13
3.1.本動詞「つく」の意味用法.....	14
3.2.本動詞「つける」の意味用法.....	16
3.3.本動詞「つく」「つける」の意味対応.....	19
4.複合動詞としての「Vつく」「Vつける」.....	22
4.1.語彙的複合動詞と統語的複合動詞.....	23
4.2.「Vつく」「Vつける」の語彙的複合動詞と統語的複合動詞との区分.....	27
4.2.1.「そうする」による置換の可否.....	28
4.2.1.1.事例観察:「Vつく」「Vつける」.....	29
4.2.1.2.まとめ.....	36
4.2.2.「受身」の可否.....	38
4.2.2.1.事例観察:「Vつく」の受身化.....	39
4.2.2.2.事例観察:「Vつける」の受身化.....	40
4.2.3.「そうする」による置換テストおよび「受身」の可否によるテストのまとめ.....	42
4.3.語彙的複合動詞「Vつく」「Vつける」.....	44
4.3.1.語彙的複合動詞「Vつく」の意味用法.....	45
4.3.1.1.物理的接着:[モノ]が[モノ]に「Vつく」.....	46
4.3.1.2.接着指向:[有生]が[モノ]に「Vつく」.....	47
4.3.1.3.接着強化:[モノ]が[モノ]に「Vつく」.....	49
4.3.1.4.対象指向:[人・生き物・モノ]が[人・モノ]に「Vつく」.....	50
4.3.1.5.到着:[人]が[トコロ]に「Vつく」.....	53
4.3.1.6.定着:[人]が[トコロ]に「Vつく」.....	56
4.3.1.7.完全化:[人・モノ]が「Vつく」.....	58

4.3.1.8.着想:[人]が[コト]を「Vつく」.....	60
4.3.1.9.まとめ	60
4.3.2.語彙的複合動詞「Vつける」の意味用法	62
4.3.2.1.物理的接着:[モノ]を[モノ]に「Vつける」	62
4.3.2.2.接着指向:[モノ]を[モノ]に「Vつける」	64
4.3.2.3.対人行為接触:[モノ]を[人]に「Vつける」	65
4.3.2.4.装着:[モノ]を[モノ]に「Vつける」	66
4.3.2.5.接触強化:[モノ]を[モノ]に「Vつける」.....	67
4.3.2.6.到達:[トコロ]に「Vつける」	68
4.3.2.7.抽象的接着:[トコロ]に「Vつける」	70
4.3.2.8.行為強化:[モノ]を「Vつける」	71
4.3.2.9.加害強化:[人]を「Vつける」	72
4.3.2.10.認知的発見:[モノ・コト]を「Vつける」	73
4.3.2.11.まとめ	73
4.3.3.語彙的複合動詞「Vつく」「Vつける」のまとめ	75
4.4.語彙的複合動詞「Vつく」「Vつける」の対応	76
4.5.統語的複合動詞「Vつけている」	80
4.5.1.統語的複合動詞としての「V慣れる」	80
4.5.2.統語的複合動詞「Vつけている」と「V慣れる」の先行研究	81
4.5.3.「Vつけている」と「V慣れる」の類似点と相違点	83
4.5.3.1.「そうする」への置換の可能性から見た「Vつけている」と「V慣れる」	84
4.5.3.2.「受身」への置換の可能性から見た「Vつけている」と「V慣れる」	87
4.5.3.3.「Vつけている」と「V慣れる」の置換の可能性:まとめ	89
4.5.3.4.語形成から見た習慣用法の「Vつけている」と「V慣れる」 ...	92
5.おわりに.....	93

表

〈表 1〉 A類語彙的複合動詞とB類統語的複合動詞の分類基準	27
〈表 2〉 「Vつく」と「Vつける」の統語テスト結果	43
〈表 3〉 「Vつく」の「ニ格」支配と意味用法	61
〈表 4〉 「Vつける」の「ニ格」支配と意味用法	74

付録

〈付録 1〉 複合動詞「Vつく」「Vつける」の語彙リスト	98
〈付録 2〉 「Vつく」の統語テスト	99
〈付録 3〉 「Vつける」の統語テスト	102



복합동사 「Vつく」「Vつける」의 의미용법에 대하여

채선영

부경대학교 교육대학원 일어교육전공

요약

본 연구에서는 일본어 동사 「つく」「つける」를 후향요소로 취하는 복합동사 「Vつく」「Vつける」의 의미용법을 고찰하였다. 의미용법 고찰에 앞서 본 복합동사를 影山(1993)의 통어분류기준에 따라 어휘적복합동사와 통어적복합동사로 분류하였다. 그 결과 「Vつく」는 어휘적복합동사로 판단되지만, 「Vつける」는 「-ている」의 형식이 되면, 어휘적복합동사로 해석되는 경우와 통어적복합동사로 해석되는 경우가 나타난다. 특히 「Vつけている」가 통어적복합동사로 해석되는 경우에는 「Vつけている」의 습관용법을 가지는 것을 알 수 있다.

복합동사 「Vつく」「Vつける」의 의미용법에 대한 연구는 姫野(1999)가 대표적인데, 본 연구에서 복합동사 「Vつく」「Vつける」가 「二格」을 취할 경우와 취하지 않는 경우로 분류한 점은 姫野(1999)의 의견과 일치한다. 하지만, 복합동사가 「二格」을 취하는 경우에는 전적으로 후향동사 「つく」「つける」의 영향을 받아 복합동사 전체의 의미에 [접착]의 뇌양스가 나타난다는 姫野(1999)의 의견과 달리, 본 연구에서는 어휘적복합동사로 판단되어지는 「Vつく」「Vつける」는 그 전향동사의 성질과 복합동사 전체의 격(格)지배 관계에 따라 두개의 그룹으로 분류하였다.

특히, 복합동사가 「二格」을 취할 경우, 그 「二格」이 전향동사의 영향을 받은 것인지, 후향동사의 영향을 받은 것인지에 따라, 복합동사 전체의 의미를 두 가지로 분류할 수 있었다. 전자의 경우, 복합동사 전체의 의미는 전향동사의 의미를 [강조]하는 형태로, 후자의 경우에는 복합동사 전향동사의 양상을 띠면서 [접착]하는 형태로 나타났다.

이상의 분류기준에 따라 「Vつく」의 의미용법은 [物理的接着/接着指向/接着強化/対象指向/到着/定着/完全化着想], 「Vつける」의 의미용법은 [物理的接着/接着指向/対人行爲接触/設置・装着/接触強化/到達/抽象的接着/行爲強化/加害強化/認知的発見]으로 나타났다.

끝으로, 통어적복합동사로 해석되는 습관용법의 「Vつけている」와 함께 습관을 나타내는 「V慣れる」를 비교·대조하였다. 그 결과, 「Vつけている」의 의미용법은 아스펙트(aspect)형식인 「-ている」가 나타내는 사태의 「반복용법」에 근거한 것인데 반해서, 「V慣れる」는 「慣れる」라고 하는 후향동사의 의미에 근거한 것으로 확인되어졌고, 이 두 형식의 상이점은 기본적으로 이러한 구조 또는 의미상의 차이에 근거한 것임이 확인되었다. 즉, 「Vつけている」의 의미용법의可否는 전향동사가 나타내는 사태가 일반적 상식에 비취보았을 때, 「습관」으로 확인되는지 아닌지에 의존하지만, 「V慣れる」의可否는 「慣れる」라는 동사가 가지는 본래적 의미와의 整合性에 의한 것이다. 예를들어 「太郎は次郎を怒鳴りつけている」가 가능한 이유는 「怒鳴る」라는 것이 어떤 주체에 있어서 습관적으로 행해지는 행위라고 일반적으로 해석될 수 있기 때문이다. 한편, 「*太郎は次郎を怒鳴り慣れている」가 부자연스러운 이유는 「怒鳴る」가 통상 주체(=主語)의 의도와는 다르게 자발적으로 生起하는 감정적 행위를 나타내는 동사라서 「慣れる」가 요구하는 「경험·체험」등에 의해서 漸次的으로 획득되는 행위를 나타내는 것이 아니기 때문이다.

1.はじめに

日本語の複合語は、独自の用法を持つ個々の単語が結合して新たに一つの語としての意味・機能を持ち、単独の語では示すことのできない豊かな表現効果を作り出す。そのうち動詞と組み合わせて作り出す造語形式を複合動詞という。その複合動詞の主たる構成パターンは次のとおりである。

- ① (名詞) 目 + (動詞) さめる = 目ざめる
- ② (動詞) 書く + (動詞) 始める = 書き始める
- ③ (形容詞) 近い + (動詞) 寄る = 近寄る
- ④ (副詞) ぶらぶら + (動詞) 下がる = ぶら下がる

以上のうち「動詞＋動詞」型の複合動詞は、前項動詞(V1)と後項動詞(V2)に分かれるわけであるが、V1が「書き＋始める」のように連用形である場合と「書いて＋みる」のようにテ形である場合とがある。本研究では上記②の「動詞連用形＋動詞」パターンの複合動詞に限り、研究対象とする。(以下、「動詞連用形＋動詞」は「V1＋V2」と表記する)

複合動詞「V1＋V2」は日本語研究において様々に分析されてきたが、なかでも代表的な研究は複合動詞の結合条件と分類に関する研究と複合動詞の後項の意味に注目した研究だった。そのうち複合動詞の結合条件とその分類に関する研究の主たるものをあげるならば、本動詞と複合動詞の意味関係を扱った寺村(1978、1984)、複合動詞の前項要素と後項要素の修飾関係を扱った長嶋(1976、1997)、本動詞と複合動詞の格支配関係を扱った山本(1984)、様々な統語的な現象から複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞に二分した影山(1993、1996、1997)、さらに

語彙概念構造と複合動詞の関係を扱った由本(1996)、認知言語学的な観点に基づく松本(1998)などがある。一方、複合動詞の後項の意味に注目した研究としては姫野(1975、1999)があり、そこでは本研究が扱う「Vつく」「Vつける」の意味用法も扱われている。

しかし、複合動詞の問題はいまだ完全には解決されていない。その原因のひとつとして、複合動詞それぞれの機能・用法の詳細な記述が不足していることがあげられる。本研究はそのような現状を踏まえ、日本語の複合動詞を考察するにあたり、「Vつく」「Vつける」というパターンの複合動詞を取り上げ、その意味用法の詳細な記述を目指す。そして、その観察・分析を通して、日本語の複合動詞の諸特徴を明らかにしていきたい。

1.1.研究目的

本研究が、複合動詞の後項要素のうち「一つく」「一つける」だけを研究対象としたのは、これらが実際に常用される例が多い¹こと、接辞的役割と転成名詞(「頭つき、顔つき、手つけ」など)としての活用度が高いこと、そして擬声・擬態語とも結合して意味が広がっていくなど造語力が強いにも拘わらず、この複合動詞「Vつく」「Vつける」に関する研究はきわめて少ないからである。従来の複合動詞「Vつく」「Vつける」に関する研究では、姫野(1999)が代表的である。姫野によれば、この複合動詞は本動詞「つく」「つける」の意味が複合動詞全体につながったものであるが、本義が残る程度によりいくつかに分類されると述べている。例えば、姫野(1999:106)は、「Vつく」の前項動詞として「行く、帰る、のぼる」のように到達点を設定できるもの、「走る、

¹ 姫野(1999:25)には、後項に位置する863語の中で、異なり語数の多い順に上位30位までの語が取り上げられている。その中で「一つく」15位、「一つける」10位である。

泳ぐ、流れる」等、移動の様相を表すものが来ると、当該複合動詞全体は【場所への到着】を示すことになる」と述べている。しかし、前述の前項動詞は、「ヲ格」と共に通過点、「デ格」と共に場所のように、「ニ格」が示す到着点以外のものを取り取ることができる。つまり、姫野の解釈では、これらの動詞が「Vつく」の前項動詞として出現するときになぜ【場所への到着】を示すことになるのかが、十分に説明されていないのである。

本研究では、以上のような姫野(1999)の不十分な分類基準を明確にするために、前項動詞が取る格の意味に注目して、前項動詞と「一つく」「一つける」の意味を範疇化することを目指す。また、当該複合動詞「Vつける」は、影山(1993)の分類基準によれば、統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分類される。このとき、「Vつける」が統語的複合動詞と解釈される場合には【習慣用法】を持ち、本研究ではそれと類似したものと解釈されることの多い「V慣れる」と比較対照しながら、その特徴を明らかにしていきたい。

1.2.研究方法

本研究では、複合動詞の構成に関して、先行する動詞構成要素を「前項動詞」あるいは単に「前項」、V1、後続する構成要素を「後項動詞」あるいは「後項」、V2と呼ぶ。また、本動詞「つく」「つける」に対し、複合動詞の後項要素の「つく」「つける」は「一つく」「一つける」、後項要素「一つく」「一つける」と組み合わせられた複合動詞は「Vつく」「Vつける」と表記することにする。さらに、観察対象は姫野(1999)が取り出した「Vつく」61語、「Vつける」107語の中から、前項要素が接頭辞化していたり、一般化していたりして分けられない語を除いた「Vつく」44語、「Vつける」72語²とした。

² Cf.本稿 p. 121.

データについては引用した文献内のデータ、新聞、小説から取り出した例と作成例があるが、作成例の場合は、ネイティブ・チェックを受けている。また副詞との共起を扱った箇所では、googleによる検索データがあげられている。

以下では、まず、本動詞「つく」「つける」の格に従った意味用法を見る。その後、「Vつく」「Vつける」を影山(1993)の基準に従って語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分け、それぞれを主に意味的観点から考察する。その際、語彙的複合動詞の「Vつく」「Vつける」については、松本(1998)と城田(1993)に基づき、前項動詞自体の格関係および複合動詞全体の格関係のあり方という観点から考察する。

一方、統語的複合動詞の「Vつける」については、まず、どのような「Vつける」が統語的複合動詞と見なされるのかを、後述する基準に従い確認した上で、当該「Vつける」を特に「V慣れる」と比較対照し、その意味・機能を解明したい。このように「Vつける」を「V慣れる」と比較対照する理由は、先行研究によると、「Vつける」は「V慣れる」と置換可能なことが多いと指摘されているからである。換言すれば、従来から置換可能とされてきたこの二つの複合動詞の使い方を詳細に観察することを通し、両者の違いを明らかにし、その結果、「Vつける」の意味機能を確定することを目指すということである。

2. 先行研究概観

従来の日本語複合動詞の研究は、大きく記述的観点からの研究と統語的観点からの研究などに分けることができる。まず、記述的観点からの研究には、姫野(1999)、寺村(1978、1984)、長嶋(1976、1997)、山本(1984)がある。次に、統語的観点からの研究には影山(1993、1996、1997)、由本(2005)がある。そして、最後に認知意味論的観点からの研究として松本(1998)があげられる。その他、他の言語との対照研究

も行われている³。格をめぐるのは、各格と動詞の組み合わせを扱っている言語学研究会(1983)と文法格と副詞格に関する城田(1993)の研究がある。

以下、本研究に特に関係する先行研究、すなわち、複合動詞と格関係に関する先行研究および、複合動詞「Vつく」「Vつける」の先行研究について見ていく。

2.1. 複合動詞と格関係に関する先行研究

『新版日本語教育事典』(2005:69)によれば、複合動詞は、「息づく・近づく・ふらつく」のように、名詞・形容詞・副詞(擬態語)と動詞が結合するものと「見回る・見終わる」のように動詞と動詞が結合するものがあるが、なかでも動詞以外の要素と動詞との結合は多様で、造語力もあり、重要である、とされながら、しかし、従来の日本語複合動詞研究は動詞同士の結合が主流であり、その複合動詞は、意味的制約や語彙的結合の制約がある語彙的複合と、関係する語が補文関係となっており造語力が強い文法的(統語的)複合の2種に大別される、とも述べている。以上のことを踏まえ、以下では、従来の複合動詞研究の中でも、特に、本研究に関係すると思われる先行研究を紹介したい。

まず、長嶋(1976:217、219)によれば、複合動詞は特にその構成要素の意味的關係を中心に以下のⅠ類、Ⅱ類の二つに分類される。

Ⅰ類 v1+V2 (修飾要素+被修飾要素):「Nが(を・に)V2」と言えるもの。たとえば、「(木を)切り倒す」、「(町内を)見廻る」「(木に)よじのぼる」等。

Ⅱ類 V1+v2 (被修飾要素+修飾要素):「Nが(を・に)V1」と言えるが、「Nが(を・に)V2」とは言えないもの。たとえば、「(本を)読み通す」、「(犬が子供に)噛みつく」、「(インクが紙に)しみこむ」等。

³ Cf. 松田(2004)

以上をまとめると、意味の中心を成すのは、Ⅰ類ではV2であり、Ⅱ類ではV1であることが分かる。

次に、山本(1984:34)⁴は、複合動詞文の名詞の格を前項動詞と後項動詞のどちらが支配しているかによって、複合動詞を次の四つのタイプに分けた。

1類:両項とも支配(泣き叫ぶ、抱き抱える、噛み砕く)

2類:前項が支配(静まり返る、走り通す、読み始める、住み込む)

3類:後項が支配(持ち重なる、差し迫る、引き起こす)

4類:両項とも支配しない(取り乱す、引き立つ、繰り返す、打ち合わせる)

以上の分類を、例えば、第2類の「静まり返る」を例に説明すると次のようになる。

- (1) a. 教室が静まり返る。
b. 教室が静まる。
c. *教室が返る。 (山本 1984:35)

「ガ格」を取った名詞句「教室ガ」は、前項動詞の「静まる」と格支配関係を認めることが可能だが、後項動詞「返る」との間に同様の関係を認めることはできない。このことから、山本(1984)は、「静まり返る」の格支配は前項動詞によって決まると見る。

次に影山(1993)は、複合動詞を語彙部門で形成される語彙的複合動詞(A類)と、統語部門で形成される統語的複合動詞(B類)に分けている。

⁴ 山本の「格支配」の定義は次のとおり。「<格支配>とは、動詞の名詞との共起制限のことであり、まさに動詞の統語的機能に他ならない。そして、ある動詞がどれだけの数の名詞を格支配するか<結合価>といい、支配される名詞を<格成分>と呼ぶ。」

- (2) A類:飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け続く、解き放す、
飛び込む、聞き渡す、(隣の人に)話しかける、こびり付く、飲み歩く、
歩き回る、踏み慌す、誉め讃える、語り明かす、震え上がる、呆れ返
る、持ち去る、沸き立つ
- B類:払い終える、話し終る、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、
働き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、数え直す、見慣れる、
登り切る、やりつける (影山1993:83)

A類とB類は同一形式を取るため形態上は区別が付かないが、意味や生産性、
様々な統語的な現象から両者の差異が明瞭になってくる。影山(1993:78)によれば、
複合動詞を構成するV1とV2の意味関係に目を向けると、A類では動作の様態・手
段(押し開ける、転げ落ちる、もみ消す)、付帯状況(飲み歩く、嘆き暮らす、語り明か
す)、並行動作(泣き叫ぶ、恋い慕う、忌み嫌う)、アスペクト(泣き止む、おりしきる、聞
き漏らす)等、B類はV1とV2の意味関係は完全に透明かつ合成語であり、補文関係
⁵として分析できる。それに複合動詞の前項動詞に起こる統語現象が統語的複合動
詞と語彙的複合動詞の分類基準になると指摘している。詳しくは4.2節で見ることに
する。

一方、城田(1993:70)は、日本語の格助詞の問題が複雑なのは一つのフォームに
多数の意味・機能が混在しているためだとし、その複雑さを解きほぐすために、一次
機能と二次機能という考え方を導入した。城田によれば、格の二次機能と言うのは、
特定の条件やある程度ははっきりと定められる条件のもとで働く機能のことで、それ
に対し、条件の限定の少ないもの、あるいは無いものを一次機能という。例えば、城田
(1993:70-80)は、「ヲ格」の一次的機能は文法的格(例えば、手紙を書く)であり、

⁵ 複合動詞のV1とV2が自立して、「手紙を書き終える」は「手紙を書くことを終える」に「雨が
降り始める」は「雨が降ることが始まる」のようになり、V1とV2の間に補文の関係が成り立つ。

二次機能は通過点・起点などを表して用言を修飾する副詞格(例えば、山をのぼる)とする。このとき文法的格というのは、例えば他動詞が直接補語を必要とする動詞であること、すなわち、格名詞が他動詞と結びつくによって、直接補語をマークする文法的機能をもたらす文法的機能を果たす格を指す。それに対し、「ニ格」(カラ・マデ・ト格)の一次機能は副詞格で二次機能は文法格である。この城田(1993)が格助詞の機能に設定した二つの区分に関しては、「Vつく」「Vつける」のV1が取る格助詞のところより詳しく見る(4.3節)。

最後に奥田(1983)は、格の形をとる名詞と動詞との組み合わせが表す構造をカテゴリー化している。この型の単語の組み合わせが表すいくつかの結びつき、その結びつきが実表する諸条件、結びつきの間にある相互関係に対して論じられている。「ニ格」名詞と動詞との組み合わせで表される結びつきを次のように三つに分けている。

イ) 対象的なむすびつき⁶

- a) ありかのむすびつき: 庭に大きな木がある。
- b) ゆくさきのむすびつき: 山に行く。
- c) くつつきのむすびつき: 口紅を唇に塗る。
- d) ゆずり相手のむすびつき: 銀行に預ける。
- e) はなし相手のむすびつき: 子供たちに話しかける。
- f) かかわりのむすびつき: 肉体にこだわる。
- g) はたらきかけのむすびつき: 精神に作用する。
- h) 道具のむすびつき: 帯を後ろ手に結ぶ。

⁶ 「対象的なむすびつき」は動作(あるいは状態)とその動作(あるいは状態)の成立にくわる対象との関係である。Cf. 奥田(1983), pp. 282-309.

ロ) 規定的結びつき⁷

- a)結果規定の結びつき:急に強盗に変わる。
- b)内容規定の結びつき:立派な男に見える。
- c)様態規定の結びつき:熱心にプロポーズする。
- d)目的規定の結びつき:墓参りに行く。

ハ) 状況的むすびつき⁸

- a)空間的な結びつき:猫がひなたにまわっている。
- b)情勢的な結びつき:子供をおぶって、この雨にやってきたの。
- c)時間的な結びつき:3時に会おう。
- d)原因の結びつき:冷たい風にオーバーのえりを立てる。

2.2.複合動詞「Vつく」「Vつける」の先行研究

複合動詞「Vつく」「Vつける」に関する先行研究は、それらを意味的観点から分類した姫野(1999)が代表的である。以下、先行研究を見て行く。

姫野(1999)は、複合動詞の結合パターンから複合動詞の後項要素としてよく使われる動詞を幾つかあげて、複合動詞の後項動詞の意味を整理している。姫野によれば、特に「つく」、「つける」は造語力が強く、以下に示すような、動詞、名詞、擬声・擬態語と結び付きながら多様な複合動詞を形成する、という⁹。

⁷ 「規定的なむすびつき」は名詞で示される状態あるいは現象は、動作そのものの成立に直接に関係せず、動作の持っている何らかの側面をきていしてかかる。 Cf.注6における同書, pp. 309–317.

⁸ 「状況的なむすびつき」は動作によっては外的な空間、時間、条件、情勢などを表現している。 Cf.注6における同書, pp. 317–323.

⁹ Cf.姫野(1999), p. 103.

- ① 動詞+「Vつく」・「Vつける」(飛び付く、書き付ける)
- ② 名詞+「Vつく」・「Vつける」(元気づく、関係づける)
- ③ 擬声・擬態語の語基+「Vつく」(うろつく、じとつく)
- ④ 形容詞+「Vつく」・「Vつける」(近づく、近づける)

一方、本動詞としての「つく」「つける」は、いずれも何かに接触・接着する意味を含み、格助詞「ニ格」を取るが、「Vつく」「Vつける」はこの「ニ」を取るか取らないかによって大きく二つに分かれ、それには本動詞の本義がどの程度残っているかという点に関わっているとし、複合動詞「Vつく」「Vつける」の意味用法を、以下のようにまとめている¹⁰。

「～つく」の複合動詞

1. 「ニ格」を取るもの
 1. 1. 場所への到着
 1. 2. 場所への定着
 1. 3. 対象への接着・密着
 1. 4. 対象への指向
2. 「ニ格」を取らぬもの
 2. 1. 状態の完全化
 2. 2. 着想
 2. 3. 状態「が」落ち着く

「～つける」の動詞

1) 接着・密着を表す「～つける」

1. 「ニ格」を取るもの
 1. 1. 場所への到着

¹⁰ 注9における同書, p. 105, pp. 111－112.

- 1. 2. 対象への接着・密着
- 1. 3. 対象への指向(完全な接着を目指す)
 - 1. 3. 1. 物理的接着
 - 1. 3. 2. 対人行為接触
 - 1. 3. 3. 主体者近接
 - 1. 3. 4. 対象への強度の接着指向
- 2. 「ニ格」を取らぬもの
 - 2. 1. 強調
 - 2. 1. 1. 物理的接着
 - 2. 1. 2. 対人行為接着
 - 2. 2. 対象の補足
 - 2. 3. 状態移行
 - 2. 4. その他

2)習慣を表す「～つける」

姫野(1999)は、まず、「Vつく」「Vつける」を以上のように後項動詞「つく」「つける」の格支配のあり方によって分類した上で、前項動詞の意味特徴を述べている。

2.3.先行研究の問題点

影山(1993)に従うならば、複合動詞はいくつかの統語的基準により、語彙的複合動詞と統語的複合動詞に二分されるとしていたが、本研究の対象である「Vつく」「Vつける」に当てはめると、影山の統語的基準だけでは、二分類するのに問題が起こる。

- (3) a. 太郎が車を玄関に乗りつけた。
b. *次郎も玄関にそうしつけた。
- (4) a. 太郎は外車を乗りつけている。
b. 次郎もそうしつけている。

「Vつける」を影山の統語的基準に従うと(3)のように不合格する場合(語彙的複合動詞と見なされる)と、(4)のように合格する場合(統語的複合動詞と見なされる)がある。このように、同一語形が語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方の可能性を持つ場合、影山の統語的基準だけでは、当該複合動詞を二分類することは難しい。このような問題があるものの、姫野(1999)では同一語形の意味分類に関しては触れていない。当該複合動詞の二分類に関する問題については第4章で詳細に見ることにする。一方、姫野(1999)では、複合動詞「Vつく」「Vつける」における意味分類の際、複合動詞全体が「二格」を取るか否かにより、分類を行っている。そのとき、後項要素「一つく」「一つける」の本義である「接着・接着」が複合動詞全体に引き継がれる程度により、意味を細分化し、「二格」を取る場合は、複合動詞の中心的意味がV2で、V1がV2を修飾するとしている。しかし、実例を見ると、以下のように、本動詞V1も「二格」名詞で現れる場合があり、必ずしもV2が意味の中核を担うとは言えない。

- (5) a. 私は結婚して以来、東京に住み着いています。 (朝日, 1999.01.05)
b. 私は結婚して以来、東京に住んでいます。
c. ??私は結婚して以来、東京に着いています。
- (6) a. モデルが切れ目に腕を通して布を体に巻きつけると、それがまるで立体裁断されたような端正で流麗な服に見える。 (朝日, 1999.04.24)
b. モデルが切れ目に腕を通して布を体に巻くと、…省略。
c. モデルが切れ目に腕を通して布を体につけると、…省略。

本論では姫野(1999)が取り上げている「Vつく」「Vつける」を対象に、影山の統語テストを行う一方、同一語形の二分類に關与する他の要因を明らかにしていく。それから語彙的複合動詞と分類される「Vつく」「Vつける」の意味分類を行う。その次、姫野(1999)の「Vつく」「Vつける」の意味用法の分類から前項動詞の格成分と複合動詞全体の格成分の關係を検討する。なお、その際には、山本(1984)の格支配關係と城田(1993)の格の範疇化に關する研究を参考にする。

3.本動詞としての「つく」「つける」

前述したように、複合動詞「Vつく」「Vつける」は本動詞「つく」「つける」が後項要素として他の動詞と結びついたものであり、本動詞だけでは表すことのできない豊かな表現効果を生み出すことができる。

統語的に自他の対応關係にある「つく」「つける」は、『基礎日本語辞典』(1989)では、「離れて關係のなかった事物が、他の事物または場に接触し、離れぬ状態になる」、ことを示す、と記述されている。また、「つく/つける」には、「つく」主体Aと、「つく」相手Bとのうゑに成り立つ作用(AがBにつく・AをBにつける)と、Aのみで成立する作用(Aがつく)がある、とも指摘されている。その「つく」「つける」が複合動詞の後項要素としてはたらくと、本動詞の意味はどうなるだろう。また、前項動詞と後項動詞は複合動詞全体の意味にどの程度影響を与えるだろう。次の例を参照されたい。

- (7) a. 一郎さんは、ボードにつかまって海岸にたどりついたという。

(朝日, 1999.08.10)

- b. 一郎さんは、ボードにつかまって海岸(*に／を)たどったという。

- c. 一郎さんは、ボードにつかまって海岸についたという。

- (8) a. 忙しい夕食時、四歳の末息子がいたずらをしたので、(末息子を)しかり
つけると、エプロンの端をひっぱり「しょーたのこと好きって言って」と繰り返す。
(朝日, 1999.08.08)
- b. 忙しい夕食時、四歳の末息子がいたずらをしたので、(末息子を)しかる
と、エプロンの端をひっぱり「しょーたのこと好きって言って」と繰り返す。
- c. *忙しい夕食時、四歳の末息子がいたずらをしたので、(末息子を)つける
と、エプロンの端をひっぱり「しょーたのこと好きって言って」と繰り返す。

以上の例からみると、複合動詞「Vつく」「Vつける」全体の意味が、後項要素「一つく」「一つける」の本動詞の意味から引き継がれているものとそうでないものがあることがわかる。これは姫野(1999)が「Vつく」「Vつける」を「二格」をとるものと「二格」をとらないものに分けて考察した観点の妥当性を示すものであるが、複合動詞「Vつく」「Vつける」の意味用法は必ずしも「二格」の有無に従って説明されるわけではない。「二格」の有無以外にこれらの複合動詞に影響を与える要素については第4章で詳細に見ることにするが、その前に「つく」「つける」が本動詞として機能する際の実態を確認しておきたい。そこで、以下では本動詞としての「つく」「つける」の実態を、先行研究を基に見ていく。

3.1.本動詞「つく」の意味用法

本動詞「つく」は「付く、着く、就く、即く、吐く、尽く、突く」などのように同音異義語が多い。その中で、ここでは、複合動詞の後項要素「一つく」で用いられ何かに接触・接着の意味を有する「付く、着く」を取りあげる。

『日本語基本動詞用法辞典』では、本動詞「つく」の意味と文型について次のよう

に規定されている(「付く」①～⑧と「着く」⑨～⑪)。

- ① 二つの物が合わさって離れない状態になる。
 - a. [物]{が/は}[物・場所]に付く。
 - b. [物]{が/は}([物]で)付く。
 - c. [物]と[物]{が/は}([物]で)付く。
 - d. [物]{が/は}[物]と([物]で)付く。
- ② ある物・事に別の物・事が(新たに)加わる。
 - a. [物・事・身体(部分)]{が/は}[物]に付く。
 - b. [人]に[力]が付く。
- ③ 人がある人のそばを離れないでいる。
 - a. [役割者]{が/は}[人・集団]に付く。
 - b. [人]{が/は}[人]に[役割]として付く。
- ④ 事柄がある状態に落ち着く。
 - a. ([人]は)[事]{が・は}付く。
- ⑤ 名前が与えられる。
 - a. [人・生き物・物]に[名称]と([いう])[名]がつく。
- ⑥ あるものの後に位置する。
 - a. [人・乗り物]{が/は}[人・乗り物・位置](の後)に付く。
- ⑦ ある金額に当たる。
 - a. [物・事]{が/は}[金額]に付く。
 - b. [物・事]{が/は}[副詞的要素]つく。
- ⑧ ある人に味方する。
 - a. [人・組織]{が/は}[人・組織]に付く。

- ⑨ ある場所から移動して他の場所に到達する。
- a. [人・生き物・乗り物・物]{が/は}[所]に着く。
- ⑩ ある場所を占める。
- a. [人]{が/は}[場所・位置]に着く。
- ⑪ 手・足・頭などがある場所に触れる。
- a. ([人]は)[身体部分]{が/は}[所]に着く。

「付く、着く」で共通している基本義は「N1(第一対象)がN2(第二対象)に合わさって離れないようになる」ことであり、N1とN2の名詞が具体的(物理的)であれ抽象的(心理的)であれ、接触・接着の様相を示す。このように本動詞「つく」が「二格」名詞と共起すると、その中核的意味は「二つの物が合わさって離れない状態になる(N1{が/は}N2にくっつく)」であると規定しておく。

3.2.本動詞「つける」の意味用法

本動詞「つける」も「つく」と同様に「付ける、着ける、突ける、漬ける、就ける」などの同音異義語が多い。その中で、複合動詞の後項要素「一つける」で用いられ、いずれも何かに接触・接着の意味を有する「付ける、着ける」を取り上げてみる。『日本語基本動詞用法辞典』では、「つける」の意味と文型について次のように規定されている(「付ける」①～⑦)と「着ける」(⑧～⑪)。

- ① 二つの物を合わせて離れない状態にする。
- a. [人・生き物]{が/は}[物・場所]に「物・身体(部分)」を付ける。

- ② ある物・事に別の物・事が(新たに)加える。
- a. [人・組織]{が/は}[力]を付ける。
 - b. [人・組織]{が/は}[物・事]に[物・事]を付ける。
- ③ 人をある人のそばを離れないようにさせる。
- a. [人]{が/は}[人・集団]に[役割者]を付ける。
 - b. [人]{が/は}[人・集団]に[人]を[役割]として付ける。
- ④ 事柄をある状態に落ち着かせる。
- a. [人・組織]{が/は}[事]を付ける。
 - b. [人・組織]{が/は}[事]に[事]を付ける。
- ⑤ 名前を与える。
- a. [人・組織]{が/は}[人・生き物・物]に[名称]という[名]を付ける。
- ⑥ 人・動物・車などの後をひそかに追う。
- a. [人・乗り物]{が/は}[人・生き物・乗り物](の後)を付ける。
- ⑦ ノートなどに書き込む。
- a. [人]{が/は}[記録]を付ける。
- ⑧ 衣服・装身具などを装う。
- a. [人・生き物]{が/は}[衣服・装身具]を[生き物・身体(部分)]に着ける。
- ⑨ 乗り物をある場所に止めて、降りられようとする。
- a. [人]{が/は}[乗り物]を[場所]に着ける。
- ⑩ ある場所を占めさせる。
- a. [人]{が/は}[人]を[位置]に着ける。
- ⑪ 手・足・頭などをある場所に触れさせる。
- a. [人]{が/は}[身体部分]を[所]に着ける。

「つく」と「つける」は自他の関係にあるため、「つける」の中核的意味用法は、対立

する「つく」の中核的意味用法と関わるものになり、「二つの物を合わせて離れない状態にする」ということになるだろう。

ただし、「付ける、着ける」のようなくっつけ動詞¹¹は、意味的な完結性を獲得するためには、第一対象(「ヲ」格名詞)の他に第二対象(「ニ格」・「へ」格名詞)を指ししめす必要がある。つまり、「ヲ」格名詞はくっつけ動詞の働きかけを受けて「ニ格」名詞に接触・接着することが示されることになるのである。(9)(10)を参照されたい。「ニ格」名詞は、(11)のように省かれることもあるが、それは「ヲ」格名詞の語彙的な意味から判断できる場合や文脈と場面から判断できる場合に限られる。

- (9) 父は窓にカーテンをつける。(日)
- (10) 運転手は車を駅の正面に着けた。(日)
- (11) 赤色のろうを練ってサンタの体を作り、白いひげをつけるとキャンドルは完成。(日)

「つく」「つける」は「ニ格」名詞を取って、その「ニ格」名詞は接触・接着される対象になる。このことから、「ニ格」を取る「Vつく」「Vつける」複合動詞は、姫野(1999)が指摘したとおり、くっつけ動詞「つく」「つける」の本義が残されたものと判断してもよいだろう。この点に注目するならば、「Vつく」「Vつける」の複合動詞は次の二種類に分けられることになる。

一つは「ニ格」を取ることから「つく」「つける」の本動詞としての意味が残っていると解釈されるものであり、もう一つは「ニ格」を取らないものである。この「ニ格」を取らない「Vつく」「Vつける」における「つく」「つける」はいわば接辞的役割を果たすものとして、前項動詞の意味を強調するかそれともアスペクト的機能を果たしていると考えられる。このような「一つく」「一つける」は、寺村(1969)のいう「付属化」、あるいは、

¹¹ Cf. 奥田(1983), p. 295.

山本(1984)のいう「接辞化」されたものとも言え、複合動詞全体に及ぶ格支配能力を欠いたものと言えるだろう。

3.3.本動詞「つく」「つける」の意味対応

前節から本動詞「つく」「つける」は具体的であれ抽象的であれ「接着・密着」の意味を持ち、両者の間には自他の対応があるが、前節の「つく」「つける」の意味対応から、その対応の仕方は様々であることが分かる。次の例を参照されたい。

- (12) a. 父は壁に棚を付けた。
a'. 棚が壁に付いた。
- (13) a. 泥がズボンのあちこちに付いていた。
a'. 子供はズボンのあちこちに泥を付けていた。

(12a)の「つける」は、動作主がその主語であり、「ヲ格」の示すものは「ニ格」で表される場所に接着される【対象】である。一方、それに対応する(12a')の「つく」では、(12a)の「ヲ格」で示された【対象】が主語となっている。(13)も同様に、「つける」の接着対象である「泥」が、「つく」ではその主語となっている。しかし、「つく」と「つける」の中には、(14)(15)のように、自他の対応関係が確認しにくいものもある。

- (14) a. 息子は夫(の側)に付いた。
a'. ?私は息子を夫(の側)につけた。
- (15) a. 彼の車はその車の後に付いた。
a'. ?私は彼の車をその車の後に付けた。

(13a')に比べ、(14a')の自他対応は不自然に感じられる。それは、「つける」の【対象】が有生(人)で動作主のコントロールがききにくいからであろう。一方(15a')の場合、【対象】が「彼の車」という無生であるにもかかわらず同じく不自然に感じられる。これは、「車」はそれ自体動くことができず、それが動くためにはそれを動かす人がいるからである。すなわち(15a')では対象に対するコントロールがききにくく、そのため他動詞形は不自然に感じられるのである。

逆に、「つける」の【対象】が有生であっても、「つく」「つける」の対応関係が自然になる場合もある。次の例を参照されたい。

- (16) a. その選手に有能なコーチが付いた。
a'. 監督はその選手に有能なコーチを付けた。

(16a)の動作主である監督は選手に対してどのようなコーチをつけるかをコントロールできる立場であるため、「つける」の対象が有生にも関わらず自他の対応関係が可能となる。つまり、対象が有生の人であっても、それに対する主語である動作主のコントロールにおける優位性が確保されれば、「つく」「つける」の対応関係は可能となるのである。次に、「ヲ格」を取るにも関わらず、その指示対象が接触の対象と見なされないために、「つく」「つける」の自他の対応が成立しない例を見る。(17)(18)を参照されたい。

- (17) a. 私は日記を付けている。
a'. *日記が付いている。

(12)(13)において「つける」の「ヲ格」は「ニ格」で示された場所に接着される対象になることを確認したが、(17)は(12)(13)と同じ「ヲ格」を取っているにも関わらず、(17)の

指示対象である「日記」は接着の「対象」ではないと解釈されるため「つく」「つける」の自他の対応関係が成立していない。具体的に次の例を参照されたい。

- (18) a. この本は高くついた。
a'. *古本屋の主人はこの本を高くつけた。
b. ?この本は高い値段についた。
b'. ?古本屋の主人はこの本を高い値段につけた。
c. この本の値段は高くついた。
c'. 古本屋の主人はこの本の値段を高くつけた。
d. この本(に)は値段が高くついた。
d'. 古本屋の主人はこの本に値段を高くつけた。

(18)の観察から、「高くつく」「高くつける」の自他の対応関係が成立しないのは、次のように考えられる。(18b)(18b')から「高くつく」「高くつける」において「この本」は接着の対象ではないこと、さらに、(18d)(18d')から、「高くつく」「高くつける」における真の接着対象は「この本」ではなく、「(その)値段」であり、一見【対象】に見える「この本」は実は、【接着場所】となるからである。すなわち、(17)(18)において自他の対応が起こらないのは、主語の指示対象が【接着対象】ではなく、【接着場所】であるということになる。

以上、本章では「つく」「つける」の対応関係を見た。その結果は以下のようにまとめられる。

- ・「つく」の主語が具体名詞であれば「泥がズボンのあちこちに付いていた」のように【接着・密着】の意味が表面的に現れるが、抽象名詞であれば「息子に忍耐力が付いた」のように【接着・密着】の意味は比喩的になる。

- ・「つける」の主語は動作主で「ヲ格」名詞が具体名詞であれば、「父は壁に棚を付けた」のように【接着・密着】の意味が表面的に現れるが、抽象名詞であれば、「私はその件にかたをつけた」のように【接着・密着】の意味は比喩的になる。
- ・「つく」「つける」において「ニ格」名詞は【接着場所】であり、「つく」「つける」が「ニ格」名詞を取ると両者の間に自他の対応関係が成立する。
- ・「つく」と「つける」の自他の対応関係において、「つく」の主語は「つける」の「ヲ格」名詞と対応する。このとき、「つく」の主語が有生、言い換えると「つける」の「ヲ格」名詞が有生の場合には、「つく」「つける」の自他の対応関係は成立しにくい。しかし、「つける」の動作主が「ヲ格」の指示対象をコントロールできる場合には自他の対応関係が成立し、動作主が使役者ことになる。

次章では、本章で見た本動詞「つく」「つける」が「Vつく」「Vつける」という複合動詞の構成素の一部として出現する際の振る舞いを詳細に考察していく。

4. 複合動詞としての「Vつく」「Vつける」

『基礎日本語辞典』(1989:732)は、「一つく」は他の動詞や名詞、副詞の部分などに付いて、その動作や状態が添い加わることなどを表す。動詞に付いた場合、その意味はほぼ本動詞「つく」の意味分類に対応する。「付く/着く」の意から“しっかり……する／完全に……になる”の強意までまたがる」と指摘している。

一方「一つける」は、「一慣れる」の関連語として「たびたび行われた結果、行為そのものにやり慣れる」ことを示すと記述している¹²。本章では、このように「つく」「つける」が「Vつく」「Vつける」という複合動詞の一部として出現する際の振る舞いを詳細

¹² Cf.『基礎日本語辞典』(1989), p.881.

に考察していく。

以下、まず4.1節では、影山(1993)に基づき、いわゆる複合動詞が語彙的複合動詞と統語的複合動詞に二分されることを確認する。その後、4.2節では、影山(1993)の提示した統語的基準に従い、「Vつく」「Vつける」が語彙的複合動詞なのか統語的複合動詞なのかを明らかにする。そして、4.3節では、語彙的複合動詞と判断された「Vつく」「Vつける」の実態を、特に「二格」名詞を支配するか否かという観点から考察する。さらに、4.4節では統語的複合動詞と判断された「Vつける」の特徴をそれと意味的に類似した「V慣れる」と比較対照させながら明らかにしていく。

4.1. 語彙的複合動詞と統語的複合動詞

本節では、影山(1993)を基に、いわゆる複合動詞は語彙的複合動詞と統語的複合動詞に二分されることを確認し、その後、本研究が対象とする「Vつく」「Vつける」が語彙的複合動詞と統語的複合動詞のどちらに属するのかを明らかにする(4.2節)。

影山(1993:75)は、複合動詞を語彙部門で形成される語彙的複合動詞(A類)と、統語部門で形成される統語的複合動詞(B類)に分けている。

- (19) A類: 飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け続く、解き放す、
飛び込む、聞き渡す、(隣の人に)話しかける、こびり付く、飲み歩く、
歩き回る、踏み慌す、誉め讃える、語り明かす、震え上がる、呆れ返る、
持ち去る、沸き立つ
- B類: 払い終える、話し終る、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、
働き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、数え直す、見慣れる、
登り切る、やりつける (影山1993:83)

A類とB類は複合語¹³として同一形式を取るため形態上は区別が付かないが、意味や生産性、様々な統語的な現象から両者の差異が明瞭になってくる。

影山(1993:78)によれば、複合動詞を構成するV1とV2の意味関係に目を向けると、A類では動作の様態・手段(押し開ける、転げ落ちる、もみ消す)、付帯状況(飲み歩く、嘆き暮らす、語り明かす)、並行動作(泣き叫ぶ、恋い慕う、忌み嫌う)、アスペクト(泣き止む、おりしきる、聞き漏らす)等、B類はV1とV2の意味関係は完全に透明かつ合成語であり、補文関係¹⁴として分析できる。しかも多くの場合、様々な程度に意味の不透明化や語彙化が進んでいる。次の例を参照されたい。

- (20) 歌舞伎町を歩き交う客層が、夜遅くまで飲み歩くサラリーマンから、新宿3丁目の百貨店などで買い物を楽しむ若者へ変わってきたと同社は判断。

(朝日, 2010.02.03)

- (21) 睡眠クリニックで診察を受け、勧められたアミノ酸のグリシンを夕食後に飲み始めると、1週間程度で寝付きが改善し、深く眠れるようになった。

(毎日, 2010.02.04)

- (20)「飲み歩く」の対象は酒類に限定され、水やジュースを飲み歩くというのは普

¹³ <語>は形態的なまとまりを構成するから、その内部に統語的な要素を介入させることを許されない。「銀座に行く」では「銀座にも行く」のように「も」や「さえ」などの副助詞が介在できるから「銀座に」は独立の句である。ところが、A類とB類は「も」等の介在を許さない。また、等位接続構造において重出する表現を文末から順に削除するという規則により、「兄は国立大学の法学部に入り、弟は私立大学の法学部に入った」「*兄は国立大学の法学部に入り、弟は私立大学の法学部に入った」のように「国立大学」といった複合語の内部まで立ち入って、共通部分を省略することは許されない。

A類: *飛びも上がる、*押しも開く / *その夜、兄は神戸で飲み歩き、弟は大阪で食べ歩いた。

B類: *払いも終える、*話しも終る / *ちょうど同じ時に、姉は本を読み終え、妹はレポートを書き終えた。Cf.影山(1993), pp.76-77.

¹⁴ 複合動詞のV1とV2が自立して、「手紙を書き終える」は「手紙を書くことを終える」に「雨が降り始める」は「雨が降ることが始まる」のようになり、V1とV2の間に補文の関係が成り立つ。

通ではないが、(21)「飲み始める」の対象は酒類に限らず、どのような液体でもよい。このように意味的制約が見られる「飲み歩く」はA類、見られない「飲み始める」はB類と分類している。次は、影山(1993)の指摘したA類とB類の統語的な現象を紹介する。

まず、A類とB類は、前項動詞を「そうする¹⁵」と置き換えできるか否かというテストによって示される。

(22) A類:私が飲み歩く。*彼もそうし歩く。

B類:私が飲み始める。彼もそうし始める。 (影山1993:80)

影山(1993)によれば、(22)のA類は「語の一部分だけが文中の照応に参加することはできない」という制約から、前項動詞を代用形「そうする」に置換することはできないが、B類にはそのような制約がないため、前項動詞は「そうする」による置換が可能となる。このような統語的現象は「尊敬語化」にも起こり、(23)のA類は前項動詞に統語的現象が起こらないが、B類の前項動詞には統語的現象が起こる。

(23) A類:*お書きになり込む、*お受けになり取る、*家にお帰りになり着く

B類:お歌いになり始める、おしゃべりになり続ける (影山1993:83)

語というまとまりの内部を「お～になる」で分析できないことは、語の形態的緊密性から当然予想できる。言い換えれば、「お～になる」は文中の主語に対する尊敬表

¹⁵ 「そうする」は一言ではなく副詞「そう」と動詞「する」から成る句であるから、(25)「そうし始める」が全体でひとつの複合動詞であるというのではない。構造的には、「そう」が副詞として独立し、「し始める」の部分だけが複合動詞を形成するはずである。しかし、V1として用いられた「し」は機能的には「そう」と結びついてはじめて意味を成すから、「し始める」という複合語の内部の「し」とその外部の「そう」を結びつけるためには語の境界を超えなければならない。Cf.影山(1993), p. 80.

現であり、また、「受け取る」「泣き叫ぶ」などは全体として一つの動詞であるから、尊敬形式は「お受け取りになる」「お泣き叫びになる」のように複合動詞全体に適用すべきであって、V1のみに付けることはできない。しかし「お歌いに始める」に当てはめると、「歌い始める」は一語ではなく、「歌い」と「始める」の二語であり、しかも「歌い」の部分が独自に主語を持つことになる。このテストを使えば、外見上は同じ形式を取る二つの表現が実は異なる派生過程に由来することが明るみに出る。次の例を参照にされたい。

- (24) a. その案に疑問を投げかける。
 b. *先生はその案に疑問をお投げになりかける。 (影山1993:84)
- (25) a. 先生はボールを投げかけた。
 b. 先生はボールをお投げになりかけた。 (影山1993:84)

(24a)「投げかける」は「提起する」の意味で、(24b)のようにV1のみの尊敬語化は不可能であるのに対し、(25a)が「今にも～しそうになる」の意味での「かける」なら、(25b)のようにV1のみの尊敬語化が成り立つ。以上のことからA類は語彙部門で形成され、複合語の内部に統語的現象は起こらないが、B類は統語部門で形成され、内部の統語的現象が起こると言える。以上の統語的現象と同様にB類複合動詞が統語部門で形成されることの証拠として、次は受動態への可能性を見てみよう。

- (26) A類:*書かれこむ、*押され開く、*たどられ着く
 B類:名前が呼ばれ始めた、愛され続ける (影山1993:87)

受身形の可能性において、A類の内部には受身形は出現しないが、B類の内部では受身形の出現が可能である。すべてのB類動詞がV1に受身形を許すわけ

ではないが、原則的には可能である。以上にあげた分類基準以外にも、以下の<表1>にあるような基準から、複合動詞はA類語彙的複合動詞とB類統語的複合動詞に分類することができる。なお、③から⑤のテストは前項動詞がいわゆる非対格動詞の場合は不可能となる。

〈表 1〉 A類語彙的複合動詞とB類統語的複合動詞の分類基準

統語テスト項目	A類:語彙的	B類:統語的
①代用形「そうする」との置換可能性	×	○
②サ変動詞の可能性	×	○
③重複構文「飲みに飲む」の可能性	×	○
④尊敬語の可能性	×	○
⑤受身形の可能性	×	○

4.2.「Vつく」「Vつける」の語彙的複合動詞と統語的複合動詞との区分

本節では「Vつく」「Vつける」が語彙的複合動詞なのか統語的複合動詞なのかを明らかにするため、影山(1993)の提示した統語的基準のうち、「そうする」による置換の可否(4.2.1節)、受身のあり方(前項動詞の受身の可否、複合動詞全体の受身の可否)(4.2.2節)という二つの項目に従ってテストを行う。この統語テストを通して、語彙的複合動詞としての「Vつく」「Vつける」と統語的複合動詞としての「Vつく」「Vつける」の相違点と類似点をまとめることが期待される。

4.2.1.「そうする」による置換の可否

「そうする」テストは、複合動詞の前項動詞を代用する句「そうする」への置換可能性により、語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分ける統語テストである。テストの対象は姫野(1999)のあげた「Vつける」101語、「Vつく」54語のすべてにし、その例文は『広辞苑』にあったもの、また、日本語母語話者の作成によるもの、筆者の作成したものからなっている。このとき、(27)のように、辞書の例を当該複合動詞の必須項を含む文に直して次のようなテストを行った¹⁶。なお、「Vつける」の場合は工藤(1995)の「完結相」である「た」「る」の形式では不自然で、「継続相」の「ている」「ていた」しか認められないので、「継続相」の形式でテストを行った¹⁷。

(27) 「Vつく」: 太郎は花子の印象が頭に焼きついた。

→*次郎もそうついた。

「Vつける」: a. 太郎は宝石を見つけた¹⁸。→*次郎もそうつけた。

b. 太郎は(普段から)宝石を見つけている。

→次郎もそうつけている。

「そうする」への置換テストの結果、本研究が対象とするすべての「Vつく」は不自然だったが、「Vつける」は「継続相」である場合に限り自然で、文中に「普段から」という副詞を挿入するとより習慣の意味が出ることが分かった。以下具体例を見ながら「Vつく」「Vつける」の特徴をまとめることにする。

¹⁶ 対象になる116語のすべてのテスト結果は付録の<付録2><付録3>を参照されたい。

¹⁷ 習慣を表す「～つける」は、アスペクトの様相を帯びており、述語として終止法にたつ時は、常に持続態「～ている」の形で用いられる。Cf. 姫野(1999), p. 118.

¹⁸ 姫野(1999)は「見つける」を複合動詞と見なす。注18における同書, p. 117.

4.2.1.1.事例観察:「Vつく」「Vつける」

- (28) a. ほうれん草が鍋の底に焦げついた。
b. *ほうれん草がそうついた。
(29) a. 太郎はやっとそこに行きついた。
b. *次郎もそうついた。

「そうする」は意図的な行為を表すが¹⁹、(28)および(29)は「Vつく」全体が意図性を含まないため、「そうする」への置換は全く不可能である。しかし、「Vつける」は(30)(=3)(31)(=4)の例に見られるように、「そうする」の置換に関して、「Vつく」とは異なる振る舞いをする。

- (30) a. 太郎が車を玄関に乗りつけた。
b. *次郎も車を玄関にそうつけた。
c. *次郎も玄関にそうつけた。
(31) a. 太郎は外車を乗りつけている。
b. *次郎も外車をそうつけている。
c. 次郎もそうつけている。

まず、(30b)は前項動詞「乗る」の部分だけを「そうする」に置き換えられない。また、「そうする」の範囲をより広く「車に乗る」にまで広げた(30c)「次郎も玄関にそうつけた」も「そうする」による置換はできない。一方、後項動詞の「つける」を「てい」形に変えた(31a)は前項動詞「乗る」の部分だけを「そうする」で置き換えた(31b)

¹⁹ B類の複合動詞の場合は、V1を「そうする」で代用しても全く問題が生じないが、「そうする」が意図的な行為を表すから、「雨が降り始めた→*そうし始めた」「父親に似始めた→*そうし始めた」などは意味的に排除される。Cf. 影山(1993), p. 80.

は不自然だが、「外車に乗る」の部分で「そうする」で置き換えた(31c)は自然である。このとき重要なのは、この「Vつける」の前項動詞は単に「乗る」ではなく「外車に乗る」という直接目的語まで含んだものであることである。また、この(31a)は「太郎は普段から外車に乗っている」という習慣の意味を持つ。以上のことから、(31a)の「乗りつけている」は、影山(1993)の基準に従えば、統語的複合動詞としての特徴を備えていると考えられる。このように、「Vつける」では、同一の前項動詞を持つものが「そうする」への置換の可能性に関して、まったく異なる結果をもたらすことがある。次の例を見てみよう。

- (32) a. ??太郎は普段から犬を怒鳴りつけた。
b. 太郎は犬を怒鳴りつけている。
i) 太郎は今犬を怒鳴りつけている。*次郎も今そうしつけている。
ii) 太郎は普段から犬を怒鳴りつけている。次郎もそうしつけている。
- (33) a. *太郎は普段から納豆を食べつけた。
b. 太郎は納豆を食べつけている。
i) *太郎は今納豆を食べつけている。*次郎も今そうしつけている。
ii) 太郎は普段から納豆を食べつけている。次郎もそうしつけている。

(32)の「怒鳴りつける」は「相手に対してはげしく怒鳴る」を意味するが、(32a)のように、「完結相」である「た」「る」の形式では、先にもみたように習慣の解釈は不自然になる。一方、(32b)のように「ている」形にした場合は、「今現在相手に対してはげしく怒鳴っている」(32b i)と「怒鳴ることを習慣として繰り返す」(32b ii)の二つの異なる意味に解釈することができる。また、(33)の「食べつける」の場合も、(33a)が示すように「完結相」の形式では習慣の解釈は困難であり、(33b)のように「ている」形にした場合には、習慣の意味にしか解釈されない。以上のことから、「怒鳴りつける」は語

彙的複合動詞と解釈される場合(32b i)と統語的複合動詞と解釈される場合(32b ii)の二つの可能性があり、「食べつける」はもっぱら習慣を表す統語的複合動詞と解釈されることができるが、ここで注目すべきは、先にも見たように、習慣用法の「Vつける」の文末は常に「継続相」になるということである。この現象は習慣用法の「Vつける」が「ている」というアスペクト形式が示す当該事態の反復性に依拠したものであることを示唆するものと思われる。

さて、以下では、以上のことを踏まえながら、同じ前項動詞を持つ「Vつける」がその格成分から、語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分類できることを見ていく。

- (34) a. 太郎は花子に買い物を言いつけた。
b. *太郎は花子にそうつけた。
(35) a. 太郎は普段から(花子に)自分が大物だと言いつけている。
b. 太郎は普段から(花子に)そうつけている。

(34a)は(34b)の「そうする」による置換が不可能なことから、影山(1993)に従えば語彙的複合動詞と分類される。そして、この(34a)における「言いつける」は「買い物をする」ということを命令する意味に解釈されるが、相手目当ての以外の命令表現²⁰は誰に対する命令かを明示する必要があるため「二格」が必須となる。一方、「言いつける」が習慣用法に解釈される場合は、(35a)(35b)に明らかなように「二格」がなくても自然である。(34)(35)の例から、「そうする」による置換が不可能な語彙的複合動詞の「Vつける」は「二格」を取るが、「そうする」による置換が可能な統語的複合動詞の「Vつける」は「二格」を取らないことも可能であることが分かる。

²⁰ 「相手目当て以外の命令表現」というのは、いわゆる命令表現以外の命令表現ということで、例えば、「立て」「座れ」という命令形は、これだけで聞き手に対する命令だということが分かる。それに対して、相手目当て以外の命令の場合は「二格」が必須である。例えば、「?立つように言った」より、「太郎に立つように言った」のように「二格」を取った方が自然である。

一方、(32b)でも見たように、語彙的複合動詞と判断される「Vつける」も「ている」形になる場合もある。そのような場合、当該複合動詞の区別、すなわち非習慣用法の語彙的複合動詞としての「Vつける」と習慣用法の統語的複合動詞の「Vつける」の区別には、「今」「普段から」といった副詞以外にどのような要素が関与するのであるうか。その点を観察するために(36)(=4)の例を参照されたい。

- (36) a. 太郎は外車を乗りつけている。
b. 太郎は玄関に外車を乗りつけている。
c. 太郎は通学に外車を乗りつけている。

まず、(36a)を見てみよう。この「外車を乗りつけている」は「ている」形で表されているが、この「ている」は結果状態の「ている」にも進行の拡張用法である反復、すなわち習慣用法の「ている」にも解釈可能である。それでは、この「ている」の二つの解釈は何によって区別されるかと言えば、(36b)(36c)が示すように、共起する連用修飾語の違いということになる。すなわち、「玄関に」という到着点を示す「二格」と共起した(36b)の「乗りつけている」は「乗りつける」の結果状態と解釈され、一方、「通学に」という目的・手段を表す連用修飾語と共起した(36c)の「乗りつけている」は「乗りつける」の習慣用法ということになるのである。換言すれば、語彙的複合動詞にも統語的複合動詞にも解釈可能な「Vつけている」の解釈を決定するのは、到着点を示す「二格」を取っているか否かということになる。

ところで、「Vつける」の「そうする」による置換テストの中では、以下のような例もあった。

- (37) a. 太郎は心を落ちつけた
b. *次郎もそうしつけた。
c. 太郎は心を落ちつけている。
i) 太郎は今心を落ちつけている。
*次郎もそうしつけている。/次郎もそうしている。
ii) 太郎は普段からそうやって心を落ちつけている。
??次郎もそうしつけている。/次郎もそうしている。

(37)の「心を落ちつける」の「そうする」による置換は(37b)が示すように不自然である。しかし、この「そうする」の「そう」が指示する内容を「心を落ちる」とすることはできない。この文の「ヲ格」を考慮するならば「心を落とす」となるはずだからである。このことから、(37c)が示す習慣用法は「心を落ちる」と「つける」が合成されたものではなく、「心を落ちつける」が全体で一語を形成し、それに「ている」形が後接し、反復(習慣)の意味を示していると考えられる。同様の分析は(38)の「絡みつける」にも当てはまる。

- (38) a. 太郎は木にそのロープを絡みつけた。
b. *次郎もそうしつけた。
c. 太郎は木にそのロープを絡みつけている。
i) 太郎は今木にそのロープを絡みつけている。
*次郎もそうしつけている。/次郎もそうしている。
ii) 太郎は普段から木にそのロープを絡みつけている。
??次郎もそうしつけている。/次郎もそうしている。

(38c ii)によれば、「絡みつける」は「ている」形で習慣を表すように見える。しかし、

「絡みつけている」のそのような解釈から、「絡みつける」を「Vつける」の統語的複合動詞と見なすことはできない。なぜならば、その前項動詞となる「絡む」は自動詞であるため「木にロープを絡む」は不自然で、その結果、「絡みつける」を前項動詞「絡む」と後項動詞「つける」の合成と解釈することも不可能になるからである。このことは「絡みつける」をそれと自他の対立がある(39)の「絡めつける」と比較対照してみると一層はっきりする。

- (39) a. 太郎はパスタにソースを絡めつけた。
b. *次郎もそうしつけた。
c. 太郎はパスタにソースを絡めつけている。
i) 太郎は今パスタにソースを絡めつけている。
*次郎もそうしつけている。/次郎もそうしている。
ii) 太郎は普段からパスタにソースを絡めつけている。
次郎もそうしつけている。/次郎もそうしている。

「ヲ格」を取る「絡める」を前項とする「絡めつける」が「ている」形になると、(39c)が示すように、進行の解釈(39c i)と習慣の解釈(39c ii)の両方が可能となるが、「そうする」による置換が可能になるのは習慣解釈の方だけである。一方、(38c ii)に明らかのように、「絡みつける」の習慣読みに対して「そうする」による置換を行うことは難しい。このことから、「絡みつける」の習慣用法は「絡みつける」全体で一語になった動詞に「ている」形が後接し反復(習慣)の意味を表すようになったものと考えられる。

「心を落ちつける」「絡みつける」のように、その「ている」形が解釈上、習慣的読みを可能にする例は他にもある。例えば、自然現象を扱った(40)(41)を参照されたい。

- (40) a. 西日がその部屋に照りつけた。
 b. *夏の日差しもそうしつけた。
 c. 西日がその部屋に照りつけている。
 i) 西日が今その部屋に照りつけている。
 ii) 西日は普段からその部屋に照りつけている。
 *夏の日差しもそうしつけている。/*夏の日差しもそうしている。
- (41) a. 北風がその窓に吹きつけた。
 b. *吹雪もそうしつけた。
 c. 北風がその窓に吹きつけている。
 i) 北風が今その窓に吹きつけている。
 ii) 北風は普段からその窓に吹きつけている。
 *吹雪もそうしつけている。/*吹雪もそうしている。

(40)(41)の「そうする」による置換テストの結果は、「落ちつける」「絡みつける」と同じく、「照りつける」と「吹きつける」が語彙的複合動詞であることを強く示唆するものである。しかしながら、自然現象を表す「照りつける」「吹きつける」と「落ちつける」「絡みつける」の間には一つの違いが観察される。それは「そうしている」による置換の可否である。「落ちつける」「絡みつける」の場合、「次郎もそうしている」は問題なく可能であるが、「照りつける」「吹きつける」といった自然現象を示す動詞の場合、その主語は必然的に無生のモノになるため、意図性を含意する「そうしている」による置換は不可能になる。このことは(42)のように、「照りつける」に自他の対立を示す「照らしつける」においても観察される。

- (42) a. 西日がその部屋を照らしつけた。
b. *夏の日差しもそうしつけた。
c. 西日がその部屋を照らしつけている。
 i) 西日が今その部屋を照らしつけている。
 *夏の日差しもそうしつけている。/*夏の日差しもそうしている。
 ii) 西日は普段からその部屋を照らしつけている。
 *夏の日差しもそうしつけている。/*夏の日差しもそうしている。

以上、前項動詞に「一つけている」を後接されると解釈上習慣用法に見えるにも関わらず、「そうする」による置換が不可能な一連の「Vつける」を見た。その結果、それらは語彙部門で前項動詞と「一つける」が合成された語彙的複合動詞であること、また、その「ている」形はこの語彙的複合動詞全体にかかって、当該事態の反復を示し、それが習慣的読みを誘発することが分かった。

4.2.1.2.まとめ

以上、本章では影山(1993)の「そうする」による置換テストを通して、「Vつく」「Vつける」が語彙的複合動詞と統語的複合動詞のどちらに分類されるかを見た。その結果は以下のようにまとめられる。

- ・「Vつく」は「そうする」による置換が不可能である。従って、影山(1993)によれば「Vつく」は語彙的複合動詞と判断される。
- ・「Vつける」は「そうする」による置換が可能な場合と不可能な場合がある。影山(1993)によれば、「そうする」による置換が可能な場合は統語的複合動詞、そうでない場合は語彙的複合動詞と判断される。

- ・「Vつける」の「そうする」による置換が可能な統語的複合動詞は、常に「ている」の形式を取り、当該事態が習慣的に行われることを示す。本研究では、この形式・用法を「Vつける」の習慣用法と呼ぶ。
- ・「Vつける」では、同一の前項動詞を取るものが「そうする」による置換の可否により、語彙的複合動詞と習慣用法の統語的複合動詞のどちらにも分類されることがある。
- ・同一語形の「Vつける」が語彙的複合動詞と習慣用法の統語的複合動詞のどちらにも分類される場合、その解釈の決定に関与するものとしては以下のものがあげられる。
 - (i) 習慣用法の統語的複合動詞の場合、「一つけている」のように、「つける」は必ず当該事態の反復を示す「ている」形式を取る。
 - (ii) 語彙的複合動詞が「二格」を必須とする場合、習慣用法の統語的複合動詞は必ずしも「二格」を必須とするわけではない。
 - (iii) 習慣的読みを容易にする「普段から」といった修飾語と共起している場合は、当該事態の習慣読みが優先される。
- ・「Vつける」の中には、「そうする」による置換が不可能であるにも関わらず、「ている」を後接されると解釈上習慣用法に思われるものがある。本研究は、それらは定義上語彙的複合動詞と見なし、その習慣的読みは当該の語彙的複合動詞全体にかかった「ている」の反復という意味機能から誘発されたものと考ええる。
- ・以上のことから、「ている」形で表される「Vつける」の習慣用法には、「前項動詞(V)」と「一つける」の「ている」形、すなわち、「一つけている」が統語的に合成されたものと、語彙部門で合成された「Vつける」全体が一語として「ている」形で表されたものがある、と考えられる。

4.2.2.「受身」の可否

日本語にはいわゆる直接受身と間接受身があるが、いずれも統語構造で形成される。影山(1993)によれば、語彙的な合成語の内部に受身形が現れるのは、「いじめられっ子、殺され役、叱られ損」など少数の例外を除いては、一般的とは認められない、という。本節で実施する「受身テスト」とは、複合動詞の前項動詞の受身の可否により、当該複合動詞を語彙的複合動詞あるいは統語的複合動詞に分ける統語テストである(影山1993:87)。テストの対象となった例文と方法は「そうする」による置換テストの場合と同様である。以下、参照されたい。

「Vつく」: 太郎が母に抱きついた。

i) *母は太郎に抱かれついた。

ii) 母は太郎に抱きつけられた。

「Vつける」: a. 太郎が部下を叱りつけた。

i) *部下が太郎に叱られつけた。

ii) 部下が太郎に叱りつけられた。

b. 太郎は部下を叱りつけている。

i) *部下は今太郎に叱られつけている。

ii) 部下は普段から太郎に叱られつけている。

iii) 部下は今太郎に叱りつけられている。

iv) 部下は普段から太郎に叱りつけられている。

上記のように、すべての「Vつく」では前項動詞の受身化は不可能であったが、「Vつける」は、前項動詞の受身化が不可能な場合(a i)と可能な場合(b ii)がある。影山(1993)によれば、前項動詞の受身化が可能な複合動詞は統語的複合動詞、

不可能な複合動詞は語彙的複合動詞ということになる。以下では、まず、「Vつく」「Vつける」の受身の可否を確認し、その後、それぞれの受身の特徴をまとめ、その結果を先にみた「そうする」による置換の結果と対照させる。

4.2.2.1.事例観察:「Vつく」の受身化

(43) 太郎はやっとそこに行きついた。 (=29)

a. *太郎はやっとそこに行かれついた。

b. *太郎はやっとそこに行きつかれた²¹。

(44) アナコンダが男に巻きついた。

a. *男がアナコンダに巻かれついた。

b. 男がアナコンダに巻きつかれた。

(43a)(44a)から明らかなように、「Vつく」の前項動詞の受身化は不可能である。このことから「Vつく」は、影山(1993)の基準によれば、語彙的複合動詞ということになる。しかし、語彙的複合動詞である「Vつく」全体の受身の可否を見ると、(43b)(44b)のような違いがあることが分かる。(43)の「行きつく」、(44)の「巻きつく」ともに「ヲ格」を取らないことから、どちらの前項動詞も自動詞と解釈される。しかし、「行きつく」の受身形「行きつかれた」は不自然であるのに対し、「巻きつく」の受身形「巻きつかれた」は自然であるという違いがある。この違いはどのように解釈されるのだろうか。本研究では、ここに関係するのは当該複合動詞の他動性の違いだと考える。つまり、「行きつく」は「ニ格」を取るが、その「ニ格」によって示されるのは「行きつく」の着点である

²¹ Google(2010. 03. 24)の検索結果、(43a)“に行かれ着いた” (44a)“に巻かれついた”との一致するものはなく、(43b) “に行き着かれた” に一致する日本語のページは約7, 410件、(44b) “に巻きつかれた” に一致する日本語のページは約126, 000件だった。ただし、(43b)の「行きつかれた」は「行きつく」の受身ではなく尊敬の用法として可能である。例えば、「部長はやっとそこに行きつかれた」のように使える。

場所であり、「行きつく」という行為の影響を直接受ける対象ではない。一方、(44)の「巻きつく」の場合、「ニ格」によって示されるのは「巻きつく」という行為の影響を直接被る人である。つまり、「巻きつく」の方が「行きつく」よりも他動性の度合いが高く、その結果、「巻きつく」は受身化が可能になるのであろう。その証拠として、(44)の「ニ格」の指示対象を(45)のようにモノにすると、(45b)と同じく受身化は難しくなる。

(45) アナコンダがその棒に巻きついた。

a. *その棒がアナコンダに巻かれついた。

b. ??その棒がアナコンダに巻きつかれた。

「Vつく」の当該複合動詞全体の受身化の可否が前項動詞の他動性に依存するということは、次節における(46)(47)の例でも確認することができる。

4.2.2.2.事例観察:「Vつける」の受身化

次に、「Vつける」の受身化の可否を見る。

(46) a. 太郎がその犬を怒鳴りつけた。

i) *その犬が太郎に怒鳴られつけた。

ii) その犬が太郎に怒鳴りつけられた。

b. 太郎はその犬を怒鳴りつけている。

i) その犬は普段から太郎に怒鳴られつけている。

ii) その犬は今太郎に怒鳴りつけられている。

- (47) a. 太郎が次郎を押さえつけた。
 i) *次郎が太郎に押さえられつけた。
 ii) 次郎が太郎に押さえつけられた。
 b. 太郎は次郎を押さえつけている。
 i) 次郎は普段から太郎に押さえられつけている。
 ii) 次郎は今太郎に押さえつけられている。

(46)の「怒鳴りつける」、(47)の「押さえつける」は受身化の可否について同じ結果を示す。つまり、どちらも「完了相」の形式では複合動詞全体の受身化しかできず、前項動詞の受身化は不可能である。この結果から、「怒鳴りつける」「押さえつける」は語彙的複合動詞と解釈される。しかし、「怒鳴りつける」「押さえつける」の「ている」形は、(46b i)(46b ii)(47b i)(47b ii)が示すように、前項動詞の受身化も複合動詞全体の受身化も可能である。このことは、「怒鳴りつける」「押さえつける」の「ている」形は、前項動詞の受身化が可能な場合は統語的複合動詞、複合動詞全体の受身化が可能な場合は語彙的複合動詞であることを示す。すなわち、その受身化の可否から、「怒鳴りつける」「押さえつける」は語彙的複合動詞であると同時に統語的複合動詞としても解釈可能であるということになる。次に、「二格」を取る「Vつける」における「貼りつける」の例を見てみる。(48)を参照されたい。

- (48) a. 太郎が壁にポスターを貼りつけた。
 i) *ポスターは太郎に(よって)壁に貼られつけた。
 ii) ポスターは太郎に(よって)壁に貼りつけられた。
 b. 太郎は壁にポスターを貼りつけている。
 i) ??普段からポスターは太郎に(よって)貼られつけている。
 ii) 今ポスターは太郎に(よって)貼りつけられている。

(48a i)(48 ii)の結果から、「貼りつける」は前項動詞の受身化はできないが、複合動詞全体の受身化は可能であることが分かる。これは「貼りつける」が語彙的複合動詞と解釈できることを示すものである。

一方、「貼りつける」の「ている」形の受身の可能性を見ると、その結果は大変興味深い。というのは、「怒鳴りつける」「押さえつける」の習慣用法の受身は、(46b i)(47b i)が示すように、前項動詞の受身だったのに対し、「貼りつける」の習慣用法の受身を示すはずの前項動詞の受身は不自然だからである。同じことは、(49)のように「ヲ格」を取る「刻みつける」の習慣用法の受身についても当てはまる。

- (49) 太郎はキャベツを刻みつけている。
- a. *普段からキャベツは太郎に(よって)刻まれつけている。
 - b. 今キャベツは太郎に(よって)刻みつけられている。

さて、これまで見てきた(46b i)(47b i)(48b i)(49a)が示す習慣用法の「Vつける」の受身化の振る舞いは何を示すのだろうか。本研究は、これらの振る舞いは、習慣読みの「一つけている」の主語は有生でなければならないという制約を示したものと考える。「習慣」というものが常に主体の意図性に基づくものであることを考えるならば、この主語の制約は当然のことと思われる。

4.2.3.「そうする」による置換テストおよび「受身」の可否によるテストのまとめ

以上、2項目の統語テスト結果に従って、「Vつく」「Vつける」が影山(1993)の言う語彙的複合動詞と統語的複合動詞のどちらに属するかを明らかにした。その結果をまとめると、次の<表2>になる。

〈表 2〉「Vつく」と「Vつける」の統語テスト結果

	「そうする」による置換	前項動詞の受身	複合動詞全体の受身
Vつく	×	×	×*
Vつける	×	×	○*
①Vつけている	○	○*	×
②Vつけている	×	×	○*

- まず、「Vつく」「Vつける」を見ると、この二つはどちらも語彙的複合動詞に分類される。「複合動詞全体の受身」の結果が異なるのは、「つく」は自動詞、「つける」は他動詞であるため当然なことである。ただ、×、○に「*」の印がついているのは、留意する点があるということを指す。「Vつく」の複合動詞全体の受身に「*」がつくのは、「太郎はアナコンダに巻きつかれた」のように主語が有生の場合は自然に感じられるためである。また、「Vつける」の複合動詞全体の受身に「*」がついているのは、「??ポスターは太郎に貼りつけられた」のように主語が無生の場合は不自然に感じられるからである。
- 次に「Vつけている」については、いわゆる習慣用法と非習慣用法を区別する。①は習慣用法の統語テスト結果で、この結果から、習慣用法の「Vつけている」は影山の言う統語的複合動詞と分類されることが分かる。影山(1993)は語彙的複合動詞と統語的複合動詞の相違を統語テストの結果により明示しようとしたが、本研究で当該複合動詞の二種類の複合動詞の違いは、「る」と「ている」という同一語形のアスペクト形式にも影響されることが分かった。それゆえ、①習慣用法の「Vつけている」の文末はいつも「つけている/た」の形式を取る。この時、Vの主語(主体)は有生で、Vが一般常識として「習慣」として認識される場合に限られる。
- ②の「Vつけている」は非習慣用法で、いわゆる「Vつける」の進行用法である。ここで注意すべきは、例えば「太郎は普段から木にそのロープを絡みつけている」のように、この進行用法の中に、「そうする」による置換は不可能だが、解釈上反復

(習慣)を意味するものがあるという点である。すなわち、語彙的複合動詞の「Vつける」の中には「ている」形になると、その反復的意味の拡張用法として習慣的に解釈されるものがある。

- ・②「Vつけている」の複合動詞全体の受身につけられた「*」は「Vつける」における「*」と同様である。主語が無生の場合には、不自然になることが多い、ということを目指す。

4.3.語彙的複合動詞「Vつく」「Vつける」

4.2節で語彙的複合動詞と分類された「Vつく」「Vつける」に対し、姫野(1999)の分類に検討を加え、語彙的複合動詞の意味用法の考察を行う。姫野の指摘どおり「Vつく」「Vつける」複合動詞全体が「二格」名詞と共起するかしないかという観点からは、「つく」「つける」の本義が保持されているか否かを判断する基準になる。このことから、本研究では、「一つく」「一つける」が【接近・接触・結合】の意味を保持しているか否かに基づいて、前項動詞(単独用法)と「二格」名詞の共起関係に従う意味用法が複合動詞全体に及ぶ影響に注目しながら、後項動詞「一つく」「一つける」の用法をカテゴリー化し「Vつく」「Vつける」の意味を規定する。

姫野(1999:119)は、「Vつく」類の複合動詞を、「二格」を取るか取らないかによって、次のように分類している。そして、複合動詞が「二格」名詞と共起する場合は、後項動詞が前項動詞の修飾を受けた【接近・接触・結合】の意味で現れる、と述べている。

- ・「に」を取るもの;場所への到着・定着、対象への接触・接着・指向
- ・「に」を取らないもの;状態の完全性、着想、状態[が]落ちつく

姫野の分類は、本動詞「つく」の本義が強く残されているものは「二格」名詞を取り、本義が稀薄になったものは「二格」名詞を取らない、としたもので、当該の「二格」名詞はもっぱら後項動詞によってのみ支配されているかのような印象を与える。しかしながら、実際には、前項動詞が「二格」名詞の格支配に影響を与えることもある点に注目して、以下では、「二格」名詞を取る前項動詞の意味用法から「Vつく」全体の意味用法を考察する。そして本動詞と複合動詞との意味を比較しながら「一つく」意味用法の範疇化を目指す。

4.3.1. 語彙的複合動詞「Vつく」の意味用法

語彙的複合動詞と分類された「Vつく」はV1とV2の意味をどのように複合動詞に引き継いでいるだろうか。本動詞「つく」の中核的な意味が【接着・密着】であることは第3章で確認した。その【接着・密着】の意味が明示されるためには、【接着場所】と【接着対象】が保証されなければならないが、「Vつく」では【接着場所】は「二格」名詞、また、【接着対象】は「ガ格」で示されることになる。

一方、意味的観点から見ると、「Vつく」には「つく」の【接着・密着】の意味が明らかなものと、その意味が希薄になっているものがある。【接着・密着】の意味が明らかな「Vつく」グループは、【接着場所】が「二格」名詞によって明示されているのが一般的である²²。それに対して、「つく」の【接着・密着】の意味が希薄なグループにあっては、「二格」が出現することはない²³、複合動詞全体の意味もV1の【強調】ということになる。以下、本研究では「Vつく」をその前項動詞の性質に従って、次のように分類し、この順に観察・分析していく。

²² 複合動詞が「二格」を取るか否かにより、後項動詞の【接着・密着】の意味の程度が異なると姫野(1999)にも指摘されている。Cf. 姫野(1999), p.104.

²³ 「二格」が出現することがあっても、それは前項動詞V1が要求するものである。

4.3.1.1.物理的接着²⁴:[モノ]が[モノ]に「Vつく」

この類の代表的複合動詞は[結びつく、巻きつく、組みつく、貼りつく]である。これらの複合動詞の「Vつく」の前項動詞は【接着場所】を示す「二格」を取る他動詞で、「ヲ格」で示される【接着対象】を「二格」の【接着場所】に接着する具体的方法を示す。したがって、それに「一つく」が後接されると、V1は接着対象が接着場所に接着する方法・様相を意味することになる。

V1の文型:[モノ]を[モノ]に働きかけVする

- (50) a. 蛇が首に巻きついた。(朝日,1999.07.11)
b. *蛇が首に巻いた.
b'. (太郎が)蛇を首に巻いた.
c. 蛇が首についた.
(51) a. 紙が壁に貼りついた.
b. *紙が壁に貼った.
b'. (太郎が)紙を壁に貼った.
c. 紙が壁についた.

(50b')の「巻く」は、動作主が【接着対象】を示す「ヲ格」名詞(=蛇)を「二格」が示す【接着場所】(=首)に接着する方法を示している。(51)も同様である。この前項動詞に「一つく」が後接されると、前項動詞の示していた【接着】の意味は「一つく」が示すことになり、前項動詞はもっぱら「一つく」が示す【接着】の仕方・様相を明示するこ

²⁴ 分類の用語においては基本的に姫野(1999)に従うが、動詞類の分類について、本研究の分析から、姫野の分類とは完全に一致していないところがあるため、独自に作成したものもある。

とになる。つまり、「一つく」が後接されると、前項動詞はV2「一つく」を修飾することになる。

4.3.1.2.接着指向:[有生]が[モノ]に「Vつく」

この類の「Vつく」の前項動詞は【接着場所】を示す「ニ格」は取らず、動作主がその動作を行うことにより、動作主が「ヲ格」名詞に近接することになる。この前項動詞は「ニ格」が示す【接着場所】は取らないが、動作主が対象への接着を示すので、接着指向動詞と名付けておく。この接着指向動詞に「一つく」が後接されると、複合動詞全体は「ニ格」を取り【接着場所】が明示されることになる。[抱きつく、吸いつく、噛みつく、食いつく、喰らいつく、かじりつく、追いつく、しがみつく/焼きつく]がこの類に該当する。

V1の文型:[モノ]を働きかけVする

- (52) a. 生きたエビやイソメをえさにするが、エビに食いつくのは大型が多い。
(朝日, 1999.01.14)
- b. *生きたエビやイソメをえさにするが、エビに食うのは大型が多い。
- b'. 生きたエビやイソメをえさにするが、エビを食うのは大型が多い。
- c. 生きたエビやイソメをえさにするが、エビにつくのは大型が多い。

(52a)「食いつく」のV1「食う」は(52b)が示すように「ニ格」を取ることができない。したがって、複合動詞「食いつく」の取る「ニ格」はV2の「つく」が支配するものと考えられる。つまり、複合動詞「食いつく」ではV2の「つく」が「ニ格」を支配し、V1はV2「つく」が示す接着の方法・様相を示していると解釈される。なお、このとき「ニ格」名詞

(エビ)は接着の場所であると同時に「食う」の働きの対象でもあり、「ガ格」を取る主語名詞は接着対象であると同時に「食う」の動作主でもある。次に「抱きつく」の例を参照されたい。

- (53) a. 滑り降りると、下で待っている母親に抱きつき、笑顔を見せる。

(朝日, 1999.02.05)

b.*滑り降りると、下で待っている母親に抱き、笑顔を見せる。

b'. 滑り降りると、下で待っている母親を抱き、笑顔を見せる。

c. ??滑り降りると、下で待っている母親につき、笑顔を見せる。

(53a)「抱きつく」の「ニ格」は、(53b)(53b')からV1の「抱く」に由来するものではないことが明らかである。しかし、「抱きつく」の「ニ格」がV2の「つく」に直接支配されたものかと言うと、(53c)からそう判断するのは難しい。確かに、本動詞「つく」は、次の例が示すように、有生の人を主語とし、同じく、有生の人をその接着対象にすることはあるが、それは(53)に明らかのように「ニ格」が示す「人の側につく」といった比喩的な表現となる。

- (54) 太郎は反主流派の課長についた。

最後に「焼きつく」を見る。以下の例を参照されたい。

- (55) a. いまでも脳裏に焼きつくその光景は新人を交えた宴で思い出した。

(朝日, 1999.04.22)

b. *いまでも脳裏に焼くその光景は新人を交えた宴で思い出した。

c. いまでも脳裏につくその光景は新人を交えた宴で思い出した。

(56) a. はっきりした色使いで細部まで描いた絵は、一度見れば目に焼きつく。

朝日, 1999.05.08)

b. *はっきりした色使いで細部まで描いた絵は、一度見れば目に焼く。

c. はっきりした色使いで細部まで描いた絵は、一度見れば目につく。

(55)(56)「焼きつく」と共起する「ニ格」は上の例からも分かるように、人の精神活動あるいは知覚活動に関係する身体部分であることが多い。つまり、「焼きつく」は「ガ格」で示される接着対象が「ニ格」で示される人の精神あるいは知覚活動部分に強く印象づけられるという比喩的意味で用いられることが多いということである。

以上の分析から「焼きつく」は、これまで見てきた「食いつく」「抱きつく」とは大きく異なっていることが分かる。その違いは、「食いつく」「抱きつく」では「ガ格」の示すものが前項動詞の動作主であると同時に「つく」の接着対象であったのだが、「焼きつく」の「ガ格」が示すものは「つく」の接着対象ではあるが、前項動詞の動作主ではないということである。この違いは「焼きつく」の「ガ格」には無生の名詞しか出現しないことから明らかである。このような「焼きつく」と「食いつく」「抱きつく」の相違は、また、後者の複合動詞が再帰的な性質を持つものであることを示唆するものでもある。

4.3.1.3.接着強化:[モノ]が[モノ]に「Vつく」

この類の「Vつく」の前項動詞は【接着場所】だけを取る自動詞で、主体が【接着対象】となり、【接着場所】に接着する意味が含まれている。それに「つく」の【接着】意味が加われ、V1で現れる【接着】の意味がしっかりとなる。[粘りつく、絡みつく、染みつく、すがりつく、まつわりつく]がこの類に該当する。

V1の文型:[モノ]に接着Vする

(57) a. 十四日にも漁網に絡みつている爆弾が確認された。

(朝日,1999.05.15)

b. 十四日にも漁網に絡んでいる爆弾が確認された。

c. 十四日にも漁網についている爆弾が確認された。

(58) a. タバコのおいが体に染みついた。

b. タバコのおいが体に染みた。

c. タバコのおいが体についた。

(57)の「絡みつく」の格支配については、V1もV2も「二格」を取ることから、それらのどちらに由来するものかを決定することは難しい。一方、副詞との共起関係に注目するならば、様態の副詞の中でも〈密着性〉を表す「しつかり」は、(57b)(57c)が示すように本動詞と共起するだけでなく、(57a)が示す「絡みつく」とも共起する。このことから、「絡みつく」においては、それを構成する「絡む」と「つく」のみならず、それらの合成から形成された「絡みつく」にも密着の意味が備わっていると言える。このとき、(57b)「絡む」(58b)「染みる」は【接着場所】を取って接着のみならず、接着様相まで含めている。この類の前項動詞は「つく」と結びつくことにより、接着の意味が強化されることになる。そして、複合動詞はV1の作用・仕方で、接着する意味になる。

4.3.1.4.対象指向:[人・生き物・モノ]が[人・モノ]に「Vつく」

この類の「Vつく」の前項動詞は【接着場所】を取れない自動詞で、接着の意味は含まれていない。しかし、後項動詞「つく」と結びつくことにより、接着志向を表す。[燃えつく、凍りつく、焦げつく、錆びつく/泣きつく、吠えつく、飛びつく、寄りつく]がこの類に該当する。

V1の文型:[モノ]が変化Vする

- (59) a. ほうれん草が鍋の底に焦げ付かないよう、また、しっかり水分が出るよう、
ときどき混ぜる。 (『アルティザン・トウレットール2』p.231)
- b. *ほうれん草が鍋の底に焦げないよう、また、しっかり水分が出る
よう、ときどき混ぜる。
- c. ほうれん草が鍋の底に付かないよう、また、しっかり水分が出るよう、とき
どき混ぜる。

(59b)が示すようにV1の「焦げる」は「二格」を取らないことから、「焦げつく」が取る「二格」は「一つく」に由来するものと判断される。「焦げつく」の特徴は動作主が設定されない点にある。動作主が設定されないことから働きかけの対象も設定されないことになる。つまり、「焦げつく」における「ガ格」はそれ自体が自発的に変化した対象を示すのである。「焦げつく」と同じタイプの複合動詞として「燃えつく」「凍りつく」がある。これらはどれも自発的に変化する結果、「二格」の示す接着場所に接着することになったことを示す。このときV1はその接着の仕方を示すことになる。次に、「泣きつく」の例を参照されたい。

- (60) 「カードを盗まれた」とか「だまし取られた」と教師に泣きつく児童が後を絶たず、カードの交換を全面禁止にした。 (朝日,1999.04.18)

上記の例を以下のように変更し、見てみよう。

- (61) a. たくさんの児童が「カードを盗まれた」と教師に泣きついた。
b. ??たくさんの児童が「カードを盗まれた」と教師に泣いた。
c. *たくさんの児童が「カードを盗まれた」と教師についた。

「泣きつく」は先に見た「焦げつく」とは逆に、「ガ格」は動作主を示すが、その「ニ格」は接着場所とは理解しづらい。上の(60)によれば、「ニ格」は「つく」よりも前項動詞の「泣く」との親和性が強いからである。以下の分析を見られたい。

(62) a. ??たかさんの児童が教師に泣いた。

≠たかさんの児童が教師に向かって泣いた。

b. *たかさんの児童が教師についた。

≠たかさんの児童が教師に向かって泣いた。

c. たかさんの児童が教師に泣きついた。

≠たかさんの児童が教師に向かって泣いた。

上記の分析が示すように、(62a)「たかさんの児童が教師に向かって泣いた」という文は可能であるが、その意味するところは「たかさんの児童が教師に泣きついた」とは異なる。(62c)「教師に泣きついた」の場合は、「たかさんの児童」が泣きながら教師のところまで行った、あるいは、教師のところまで行き泣いた、ということが示されるが、「教師に向かって泣いた」の場合、児童が教師のところまで行った、という意味は含意されない。この違いを考慮するならば、「泣きつく」の取る「ニ格」には接着場所の意味があると考えられるだろう。

以上、ここでは「焦げつく」「泣きつく」を見た。この二つはどれも同じ「ニ格」を取り、前項動詞が自動詞であることから、同一のグループにまとめられるように見えるが、実際は、格支配のあり方、および、その格によって示された名詞句の意味役割のそれぞれにおいて違いがあることが明らかになった。

4.3.1.5.到着:[人]が[トコロ]に「Vつく」

この類の「Vつく」の前項動詞は【接着場所】だけを取る自動詞で、主体である人が【接着場所】まで移動して、その場所に接着する意味が含まれている。それに「つく」の【接着】意味が加われ、移動後の到着の意味がしっかりとなる。[行きつく、帰るつく、のぼりつく、走りつく、泳ぎつく、辿りつく、流れつく]がこの類に該当する。このうち、「行き、帰り、のぼり」は「二格」を取る方向性移動動詞であるのに対し、「走る、泳ぐ、辿る、流れる」は「二格」を取らず、「マデ格」を取る状態性移動動詞である。

V1の文型:[人]が[トコロ]に移動Vする

- (63) a. …省略、修験道の記憶をとどめる求菩提資料館に行き着く。
(朝日, 1999.06.27)
b. …省略、修験道の記憶をとどめる求菩提資料館に行く。
c. …省略、修験道の記憶をとどめる求菩提資料館に着く。
- (64) a. 三人は自力で対岸に泳ぎ着き、救助を待っている。十三人は川に流され、行方不明。その後、川が流れ込んでいる三保ダムの入河口付近に五、六人が流れ着き、ぐったりしている、と連絡があった。(朝日, 1999.08.14)
b. 三人は自力で対岸まで泳ぎ、救助を待っている。…省略、六人が流れ、ぐったりしている、と連絡があった。
c. 三人は自力で対岸まで着き、救助を待っている。…省略、六人が着き、ぐったりしている、と連絡があった。

(63b)「行く」は【接着場所】が「二格」名詞で示され、【接着場所】は移動する方向と

して現れるのに対し、(64b)「泳ぐ」「流れる」などの状態性の移動動詞²⁵は「ヲ格」を取ることができるが、そのとき「ヲ格」によって示される名詞は当該動詞の示す行為が行われる場所を示す。また、これらの動詞が「ニ格」と共起するのは、「走って行く・泳いで行く」のように方向性を持つ移動動詞と合成してからであり、そのとき【到着】の意味を持つことになる。以上の例は前項動詞だけを取る文(63b)(64b)だけでも、複合動詞の意味は十分伝えられるが、「つく」と結びつくことにより、「やっと着いた」という苦勞のニュアンスが加わる。次の(65)の「やっと」と「すぐ」という副詞との共起関係からみると「つく」の役割がより明らかになる。

- (65) a. …省略、修験道の記憶をとどめる求菩提資料館に(やっと・*すぐ)
 行き着く。 (＝63)
 b. …省略、修験道の記憶をとどめる求菩提資料館に(やっと・すぐ)行く。
 c. …省略、修験道の記憶をとどめる求菩提資料館に(やっと・すぐ)着く。

(65a)の「ニ格」の支配の問題も、「行き着く」のV1もV2も「ニ格」を取ることから、どちらがより影響を与えたかを判断することは難しい。一方、副詞との共起関係から見ると、「すぐ」と「やっと」という<起動への時間量²⁶>を表す時間関係副詞は(65b)(65c)と共起できるが、(65a)「行き着く」は「やっと」としか共起できない。これは本動詞と複合動詞の間に意味的な差があることを示すものである。<起動への時間量>を表す時間関係副詞「やっと」は、事態が長期の時間的経過を経て、起動し実現したことを指すもので(<長期所要型²⁷>)、「すぐ」は、事態の取り掛かり、起動までに要する時間量

²⁵ Cf. 奥田(1983), p. 292.

²⁶ 仁田(2002:246－255)によれば、時間関係副詞に属する起動の時間量は事態への取り掛かりまでの時間量、事態が発生・実表するまでの所要時間量に関わり、時間量に従って<僅少所要型><中期所要型><長期所要型>に分ける。

²⁷ 注27における同書, p. 253.

がきわめてわずかであることを指すもの(〈僅少所要型²⁸⁾〉)である。

以上の個々の時間関係副詞の定義から、「行き着く」が「すぐ」と共起しないのは「行き着く」が長期の時間がかかる行為と理解されることを示唆していると考えられる。

一方、「やっと、ようやく、とうとう、ついに」などの〈長期所要型〉の時間関係副詞は、事態の起動・実現までの所要時間が長期にわたることを表すだけではなく、事態の起動・実現に至るまでの経過に多大の労力・エネルギーが費やされたという、実態実現までの心理的な長さの意味合いをも表すと言う。このことも「行き着く」がそれを構成するV1、V2の本動詞とは異なる性質を持つものであることを示している。

- (66) a. 異様な光景に危険を感じたヴェネリかとデジリは、遠回りを余儀なくされ丘の上に登り着いていた。(『種の寿命:デ・アロハデの伝承』, p.151)
b. …省略、遠回りを余儀なくされ丘の上に登っていた。
c. …省略、遠回りを余儀なくされ丘の上に着いていた。
- (67) a. 温泉旅行を終えて出発地の酒屋に帰り着き、レンタカーのバスの掃除や後片づけを済ませてのことだ。(朝日, 1999.02.26)
b. 温泉旅行を終えて出発地の酒屋に帰り、…省略。
c. 温泉旅行を終えて出発地の酒屋に着き、…省略。

(66)(67)はV1とV2の影響力はほぼ同じように見える。方向性の移動動詞と「一つく」を組み合わせると複合動詞を作り出すと、前項動詞は「二格」名詞(場所)に着くための方法を表し、前項動詞には本動詞「つく」のくつつくの本義が加えられ【終着・到着】の意味になり、苦労のニュアンスが含まれる。つまり、(66a)「登り着く」(67a)「帰り着く」に対し(66b)「登る」(67b)「帰る」だけでは苦労のニュアンスが欠け、(66c)(67c)「着く」だけでは帰還のニュアンスが欠ける。

一方、「走る、泳ぐ、飛ぶ、辿る、流れる」などの状態性の移動動詞²⁹をV1とする

²⁸ 注27における同書, p. 247.

「Vつく」は「一つく」と結び付くと「二格」名詞を取り、その「二格」名詞は当該動作の及ぶ範囲を接着対象が密着する場所として限定することになる³⁰。

- (68) a. 三人は自力で対岸に泳ぎ着き、救助を待っている。十三人は川に流され、行方不明。その後、川が流れ込んでいる三保ダムの入り口付近に五、六人が流れ着き、ぐったりしている、と連絡があった。 (=64)
- b. *三人は自力で対岸に泳ぎ、救助を待っている。…省略。
- b'. 三人は自力で対岸まで泳ぎ、救助を待っている。…省略。
- c. 三人は自力で対岸に着き、救助を待っている。…省略。

(68a)複合動詞「泳ぎ着く」は、(68c)から本動詞「着く」の「二格」を受け継ぎ、V2の格支配を受けていると解釈される。なぜなら、(68b)が示すように、V1の「泳ぐ」はその到達点を示すために取るのは「名詞＋まで」であり、「二格」ではないからである。また、(68c)から、「着く」が示す到着の様態を示すためには、(68a)のようにその様態を明示するV1が必要であることが分かる。

4.3.1.6.定着:[人]が[トコロ]に「Vつく」

この類の「Vつく」の前項動詞は【接着場所】だけを取る自動詞で、主体である人が【接着対象】となって、【接着場所】に接着する意味が含まれている。それに「つく」の【接着】意味が加われ、V1で現れる状態の意味がしっかりとなる。[住みつく、居つく]がこの類に該当する。

²⁹ 注27における同書, p. 292.

³⁰ 注27における同書, pp. 291－292, 城田(1993), p. 74.

V1の文型:[人]が[トコロ]に存在Vする

- (69) a. 私は結婚して以来、東京に住み着いています。 (=5)
b. 私は結婚して以来、東京に住んでいます。
c. ??私は結婚して以来、東京に着いています。
- (70) a. 犬はひとに、猫は家に居つくというが、…省略。 (朝日, 1999.10.13)
b. 犬はひとに、猫は家に居るというが、…省略。
c. ??犬はひとに、猫は家につくというが、…省略。

(69b)(70b)には【接着場所】が「二格」名詞で示され、その場所へ存在するという意味を果たしている。それらを前項動詞とする「Vつく」は【定着】の意味を表すが、(69b)(70b)だけでも、複合動詞の意味は十分伝えられるが、「つく」と結びつくことにより、場所への接着が強調される。次の(71)の「ずっと」という副詞との共起関係からみると「つく」の役割がより明らかになる。

- (71) a. 私は結婚して以来、ずっと東京に住み着いています。(=69)
b. 私は結婚して以来、ずっと東京に住んでいます。
c. *私は結婚して以来、ずっと東京に着いています。

(71a)「住み着く」についてはV1もV2も「二格」を取ることから、どちらがより影響を与えたかを判断することは難しい。一方、副詞との共起関係から見ると、「ずっと」という期間を示す副詞句はV1の「住む」としか共起できない。「ずっと」という副詞は同じ状況が長く続いていることを示すことから「着く」のような瞬間を表す動詞とは共起しにくいことを考慮するならば、(71c)においてはV1(「住む」)の方がV2(「つく」)よりも影響を与えていると言える。すなわち、「住みつく」という複合動詞においては、後

項動詞である「つく」よりも前項動詞「住む」の方が意味的により影響を与えている、ということである。

(72) これ以上私は、悲しみの中に住み着く必要はないんだ。

(『勇気を出して:だいじょうぶ、きつとうまくいく』, p.46)

(72)のように「二格」名詞が抽象的なもの場合は、抽象名詞に「中」を付けるなどの空間化する手続きが必要である。

4.3.1.7.完全化:[人・モノ]が「Vつく」

この類の「Vつく」の前項動詞は【接着場所】を取れない自動詞で、接着の意味は含まれていないし、複合動詞全体にも「接着場所」が見られない、接着の意味が希薄化になっているものである。複合動詞文からV1だけを用いるときの意味は通じるが、V2だけを用いる場合の意味は複合動詞の意味と相当違う。そして、この類の「Vつく」の後項動詞は前項動詞に接辞的な役目を果たしていると認めてもよい。[寝つく、病みつく、煩いつく、燃えつく、焼けつく、焦げつく、凍りつく、凍てつく]がこの類に該当する。

V1の文型:[人・モノ]が変化Vする

このグループの格はV1が決定するだけでなく、このグループの前項動詞は「二格」を取ることがないため、このグループの複合動詞が「二格」を取ることはない。ここでは、グループの代表として「寝つく」を取り上げ、分析していく。以下を参照されたい。

(73) 子供がやっと寝ついた。 (姫野1999:109)

i)主格「子供が」:動作主→ ϕ

変化対象→子供がやっと寝ついた。

接着対象→ ϕ

ii)二格「 ϕ 」:働きかけの対象→ ϕ

接着場所→ ϕ

(73)「寝つく」の特徴は上の分析に明らかなように、他の「Vつく」で想定された接着対象と接着場所の両方が形式的にも意味的にも特定できない点である。このとき後項動詞「一つく」はどのように解釈すればよいのだろうか。その解明には、「寝つく」と「一つく」がつかない「寝る」との比較対照が不可欠であるが、その前に、「寝つく」という複合動詞の意味に対する姫野(1999)の指摘を見ておきたい。

(74) a. 子供がやっと寝ついた。 (姫野, 1999:109)

b. 祖父が寝付いてしまった。

姫野(1999:109)は、(74a)は「子供がやっと眠りの状態に入った」、(74b)は「祖父が(病気で)長く寝るというひどい状態に至った」ことを示す、と指摘している。この姫野の指摘に従うならば、(74a)(74b)のどちらにおいても、「寝る」に対して「寝つく」は「寝ていない状態」から「寝た状態」への移行・変化に着目するということになる。これは、言い換えるならば、「寝つく」のように主語の意図性を伴わない自動詞に「一つく」が後接されると、当該行為への変化場面、当該行為・動作の成立場面が焦点化されるということである。

4.3.1.8.着想:[人]が[コト]を「Vつく」

この類の「Vつく」の前項動詞は【接着場所】を取らない他動詞の中、人の知覚を表す動詞で、さらに「つく」と結びついた「Vつく」も【接着場所】を取らないため、当該複合動詞全体には【接着】の意味合いは現れない。[思いつく、考えつく]がこの類に該当する。

V1の文型:[人]が[コト]を知覚Vする

- (75) わかり切っているなら東新町の叔母の内へでも久し振りに遊びに行こうと
思い付く。 (『死線を越えて』, p.209)

このグループも前述のグループと同じく、その格はV1が決定するだけでなく、前項動詞が「二格」を取ることもないため、このグループの複合動詞も「二格」を取ることはない。また、意味的観点からも、前述のグループと同じ特徴が確認される。つまり、「一つく」が後接されると、前項動詞の示す内容の成立に焦点が置かれることになる。しかし、ここで問題としているグループの複合動詞は、この特徴の他、当該事態の成立が主語の意図とは関係なく自発的に生起したという意味も含意する。

4.3.1.9.まとめ

以上、本章では姫野(1999)の「Vつく」の意味分類に検討を加え、複合動詞におけるV1とV2意味に関して観察した。その結果は以下のようにまとめられる。

〈表 3〉「Vつく」の「二格」支配と意味用法

複合動詞 の意味	複合動詞 の格	「二格」支配の可否		V1の意味	V2「ーつく」の意味
		V1	V2		
物理的接着	二格を 取る	×	○	仕方・様相	接着
接着指向		×	○	働きかけ	接着
接着強化		○	○	接着方法	接着
対象指向		×	○	変化	接触
到着		○	○	移動	到着
定着		○	○	存在	強調
完全化	二格を 取らない	×	○	自然現象	強調
着想		×	○	知覚	強調

- ・「Vつく」が【接着場所】を取る場合は、「Vつく」全体は接着様相が見られ、V2の接着の意味が加わるが、【接着場所】を取らない場合は、「Vつく」全体に接着様相は希薄になり、V2はV1の接辞的役割をする。
- ・「Vつく」が【接着場所】を取る場合は、V1の性格により次のように細分化される。
 - (i) 前項動詞が【接着場所】を取る場合([モノ]を[モノ]にV1/「モノ」にV1)はV1を【接着動詞】とし、V2の接着様相により、V1の接着様相が強くなる。このとき「Vつく」は「**V1の仕方をして接着する**」という意味用法を持つ。
 - (ii) 前項動詞が【接着場所】を取る場合([トコロ]に/までV1:移動動詞・[トコロ]にV1:存在動詞)は前項動詞が移動動詞であると【到着】を、存在動詞であると【定着】を表す。【到着】は「V1の仕方移動して【接着場所】に到着する」、【定着】は「V1の存在がくっつく」ことを意味する。
 - (iii) 前項動詞が【接着場所】を取らない場合([モノ]をV1)はV1を【接着指向動詞】とし、V2の接着様相により、V1の接着指向が強くなる。このとき「Vつく」は「**V1の仕方をして接着指向する**」という意味用法を持つ。

(iv) 前項動詞が【接着場所】を取らない[モノ]がV1)のV1は【自然現象動詞】を表すもので、V2の接着様相により、V1の現象が比喩的に接着することを表す。

「【接着場所】へ強くV1」という意味用法を持つ。

・「Vつく」が【接着場所】を取らない場合も、V1の性格により次のように細分化され、V2は接辞化している。

(i) V1が自然現象である場合、V2はアスペクト様相を表わしている。

(ii) V1が認知動詞である場合、【着想】という意味になる。

4.3.2.語彙的複合動詞「Vつける」の意味用法

本研究では、前節「Vつく」の意味用法で見たように、「二格」名詞を伴う「Vつける」も本動詞「つける」の意味から出現すると考える。すなわち、「Vつける」は本動詞「つける」に前項動詞の意味が加えられ、本動詞より限定的で具体的な意味用法を持つと考えるのである。姫野(1999)は、「Vつける」を「二格」名詞を取る後項動詞の意味を基にしながら前項動詞の意味傾向によって分類しているが、本研究では「Vつける」の意味用法を前項動詞が取る「二格」名詞との関係から考察する。というのは、姫野は「二格」名詞の出現をもっぱら後項動詞の影響だとしているが、本研究では、「Vつける」に出現した「二格」には前項動詞に由来するものがあり、その場合、「二格」名詞と前項動詞との関係が「Vつける」意味全体に影響を与えると考えるからである。

4.3.2.1.物理的接着:[モノ]を[モノ]に「Vつける」

この類の「Vつける」の前項動詞は「二格」が示す【接着場所】を取る他動詞で、「ヲ格」の示す【接着対象】を【接着場所】に接着するという意味を持つ。この前項動詞に

後項動詞「つける」の【接着】の意味が加わり、V1の示す【接着】の意味が強化されることになる。[巻きつける、絡みつける、括りつける、貼りつける、縛りつける、結わえつける、結びつける、こすりつける、塗りつける、染めつける、据えつける、備えつける、植えつける、盛りつける、生みつける]はV1が示す接着様相がV2の「つける」によってより強化された【物理的接着】を表す。

V1の文型:[モノ]を[モノ]に働きかけVする

- (76) a. ふろやかまどのすすを日本酒でといて顔に塗りつける奇祭「とんどさん」が、美保関町であった。(朝日, 1999.01.15)
- b. ふろやかまどのすすを日本酒でといて顔に塗る奇祭「とんどさん」が、美保関町であった。
- c. ふろやかまどのすすを日本酒でといて顔につける奇祭「とんどさん」が、美保関町であった。
- (77) a. 内装も、骨組みにアルミ板を壁紙のようにはりつける工法から、骨組みを省いて強度のあるアルミのパネル板をはめ込むだけにして作業を効率化する。(朝日, 1999.01.29)
- b. 内装も、骨組みにアルミ板を壁紙のようにはる工法から、……省略。
- c. 内装も、骨組みにアルミ板を壁紙のようにつける工法から、……省略。

(76b)(77b)では動作主が「ヲ格」名詞に対する働きかけの作用により、その「ヲ格」名詞の指示対象が「ニ格」名詞の示す【接着場所】に接着することになる。この前項動詞が「つける」と結びついて複合動詞になると、前項動詞の接着の意味が後項動詞により強化される。これは言い換えるならば、この類の「Vける」では、それ自身接着の意味を持つV1がV2「つける」の方法・仕方としてV2を修飾することになるという

ことである。

4.3.2.2.接着指向:[モノ]を[モノ]に「Vつける」

この類の「Vつける」の4.3.2.1節と同じく前項動詞が「ニ格」が示す【接着場所】を取る他動詞で、「ヲ格」の示す【接着対象】を【接着場所】に接着するという意味を持つ。[投げつける、打ちつける、引きつける、刻みつける、彫りつける、書きつける]のように「ニ格」が示す【接着場所】がV1が示す行為の方向を表す場合、V2はV1の行為の【強調】を表すことになる。

V1の文型:[モノ]を[モノ]に働きかけ(方向性)Vする

次に、V2がV1の【強調】を示す「Vつける」を、「投げつける」を例として見る。以下を参照されたい。

- (78) a. 審判にボールを投げつける行為で、昨年八月にセ・リーグからシーズン終了までの出場 停止処分を受けて帰国して以来の来日。
(朝日, 1999.01.22)
- b. 審判にボールを投げる行為で、…省略。
- c. ??審判にボールをつける行為で、…省略。

「投げつける」の前項動詞「投げる」は、(78b)から、動作主が「ヲ格」名詞によって示される対象を「ニ格」名詞の示す到達点に到達させることを示すが、これに「つける」が後接されると、V1の示す「投げる」の意味、すなわち対象が到達点に完全に到達したと言う意味が【強調】されることになる。

4.3.2.3.対人行為接触:[モノ]を[人]に「Vつける」

この類の「Vつける」の前項動詞は「二格」名詞を取り、その「二格」名詞は動作主の動作を受ける人(受け手)を示す(例えば、手紙を友達に送る、成績表を母に見せる)。「Vつける」の「二格」名詞がモノの場合には、「Vつける」は物理的な接着を示すことになるが、それが人である場合は、動作主の行為自体が受け手に接着したかのような解釈になる。そこで本研究では、そのような「Vつける」を取りあえず【行為接触】と呼んでおく。このように、ここで扱っている動詞と「一つける」の組み合わせは、前項動詞の行為が一方的に「二格」によって示される対象に行われることを意味することになるが、姫野(1999)はこのような動詞類を「対人行為接触」と名付けている。[言いつける、申しつける、売りつける、送りつける、見せつける、貸しつける、買いつける、受けつける/呼びつける、寄せつける]がこの類に該当する。

V1の文型:[モノ]を[人]に行為接触Vする

- (79) a. ウイルスの付いたメールをアドレス帳にある五十人に勝手に送りつける。
(朝日, 1999.06.22)
- b. ウイルスの付いたメールをアドレス帳にある五十人に勝手に送る。
- c. *ウイルスの付いたメールをアドレス帳にある五十人に勝手につける。
- (80) a. 「おばちゃん、〇〇ったらねえ、学校でぜんぜん勉強しないんだよ。
寝てるか、ふらふら遊んでいるか、どっちかなの。なーんにもしないの」学
校に用事があってやって来た私を捕まえて、娘の同級生たちが言いつけ
る。
(朝日, 1999.12.20)
- b. 省略……、娘の同級生たちが言う。
- c. *省略……、娘の同級生たちがつける。

- (81) a. 通常プロレスでは、勝敗よりも相手と自分の凄さを観客に見せつけることを重視する。
(朝日, 1999.08.23)
- b. 通常プロレスでは、勝敗よりも相手と自分の凄さを観客に見せることを重視する。
- c. *通常プロレスでは、勝敗よりも相手と自分の凄さを観客につけることを重視する。

上記の例が示すように、この類の複合動詞は、それから「一つける」を取り除いた前項動詞だけでも文は完結するが、「一つける」が後接されると、動作主の作用が受け手に接着するかのようになり、結果的に、前項動詞の示す行為が【強調】されることになる。

このグループの中には、以下の例のように、本来「二格」によって示される接着場所が主語自身という再帰的な「Vつける」もある。そのような場合には、「二格」は明示化されないのが普通である。例えば、以下の「呼びつける」がその一例である。

- (82) a. 近くに住んでいるわけでもないのに、すぐに姑を呼びつける。
(朝日, 1999.04.21)
- b. 近くに住んでいるわけでもないのに、すぐに姑を呼ぶ。
- c. *近くに住んでいるわけでもないのに、すぐに姑をつける。

4.3.2.4.装着:[モノ]を[モノ]に「Vつける」

この類の前項動詞は【接着場所】を示す「二格」を取らず、動作主が当該動作を通して「ヲ格」名詞に働きかけることを示す他動詞である。この前項動詞は表面的に【接着場所】を示すことはないが、この類に該当する[縫いつける、焼きつける、割り

つける、作りつける、取りつける]は「V1の仕方でヲ格の対象をニ格に接着する」という【装着】の意味になる。

V1の文型:[モノ]を 創りあげVする

- (83) a. 太郎は上着の胸にワッペンを縫いつけた。
b. *太郎は上着の胸にワッペンを縫った。
b'. 太郎はワッペンを縫った。
c. 太郎は上着の胸にワッペンをつけた。

(83)「縫いつける」のV1は何かを作り出す意味を持つ他動詞で、それ自身は接着の意味を持たず、これに後接される「一つける」により【装着】の意味を持つことになる。このようにV1が作り出す意味を持つ「編む、縫う、焼く、作る」がこの類に該当する。

4.3.2.5.接触強化:[モノ]を[モノ]に「Vつける」

この類の前項動詞は4.3.2.4節と同じく、【接着場所】を示す「ニ格」を取らず、動作主が当該動作を通して「ヲ格」名詞に働きかけることを示す他動詞である。しかし、「たたきつける、吸いつける、押しつける、切りつける」の前項動詞には多かれ少なかれ、働きかけの対象に対する【接触】の意味があるものである。このような接触の意味を含む前項動詞に「一つける」が後接されると、まず、「ニ格」が出現し、「ヲ格」の対象が「ニ格」の示す場所に【接着】することを意味することになる。

V1の文型:[モノ]を 働きかけ(接触)Vする

以下の例を参照されたい。

- (84) a. 太郎は次郎にナイフを切りつけた。 b. ??太郎はナイフを切った。
c. 太郎は次郎にナイフをつけた。
- (85) a. 太郎は次郎を切りつけた。 b. 太郎は次郎を切った。
c. *太郎は次郎をつけた。

ただ、「切りつける」の場合は複合動詞全体が「二格」を取る場合と取らない場合がある。(84a)の「二格」はV2から引き継がれているもので、そのときV1は【接着】の方法・様相を表すことになる。一方、(85a)は複合動詞全体が「二格」を取らないため、V1の【強調】と解釈することもできる。しかし、複合動詞が「二格」を取らないにも関わらず、【接着】の意味になる場合がある。次の例を参照されたい。

- (86) a. 磁石は鉄を吸いつけた。 b. 磁石は鉄を吸った。 c. ?磁石は鉄をつけた。
c'. 磁石は鉄を【自分自身に】つけた。

(86a)「吸いつける」は「二格」が出現しなくても、【接着】の意味を持つ。それは「磁石」が【接着場所】であると同時に、その接着の「使役者」になっているため、まるで「動作主」の振り舞いをしていると思われる。因みに「吸いつける」は再帰的性質を持っているため「二格」が表面化されない。

4.3.2.6.到達:[トコロ]に「Vつける」

この類の「Vつける」の前項動詞は【接着場所】を取らず、動作主の交通手段の利用あるいは動作主の移動・運動を示す。この前項動詞に「一つける」が後接されると、

動作主(あるいは交通手段)が「二格」の示す【接着場所】まで移動し【到達】する意味になる。このときV1は到達の方法・様相と解釈されることになる。[乗りつける、漕ぎつける、駆けつける、馳せつける]がこの類に該当する。

V1の文型:[モノ]を移動Vする/[場所]を駆ける

- (87) a. 愛犬家といえば、軽乗用車で河川敷に乗りつける年配の夫婦がいますが、犬を車から出て運動させ、自分たちは車内から眺めています。

(朝日, 1999.01.19)

- b'. *愛犬家といえば、軽乗用車で河川敷に乗る年配の夫婦がいますが、
…省略。
b. 愛犬家といえば、軽乗用車(を・に)乗る年配の夫婦がいますが、…省略。
c. 愛犬家といえば、軽乗用車で河川敷につける年配の夫婦がいますが、
…省略。

「乗る」は【接着場所】である「二格」を取らないもので、「一つける」が後接されることにより、V1の仕方で移動し【接着場所】に到達する意味を持つ。次に「駆けつける」を参照されたい。

- (88) a. 翌十三年の六月二十二日には「十七星三十三才」の祝賀句会に高浜虚子も駆けつけ、「大寺や庫裡は人の世三十三歳」と遊び心のある句を寄せている。
(朝日, 1999.12.17)
b. *翌十三年の六月二十二日には「十七星三十三才」の祝賀句会に高浜虚子も駆け、…省略。

- c. ?翌十三年の六月二十二日には「十七星三十三才」の祝賀句会に高浜
虚子もつけ、…省略。

「駆けつける」の格とその意味役割の関係は以下になるだろう。

(89) 太郎はそこに駆けつけた。

i)主格「太郎が」:動作主→太郎が駆けつけた。

動作主→太郎が太郎自身をそこにつけた。

ii)ヲ格「太郎自身を」:接着対象→太郎が太郎自身をそこにつけた。

iii)ニ格「そこに」:接着場所→太郎が太郎自身をそこにつけた。

「駆ける」が取る「ヲ格」は「駆ける」の場所・経路を示すもので、「駆けつける」のV1はV2「つける」の方法・仕方を表す修飾句として解釈される。「太郎は駆けながら太郎自身をそこにつけた」、また、「駆けつける」は再帰的な複合動詞ということでもある。

4.3.2.7.抽象的接着:[トコロ]に「Vつける」

この類の前項動詞は自然現象を表し、「一つける」が後接されると「ニ格」の示す【接着場所】が出現するようになる。そして、複合動詞全体に接着の意味が加わり、結果的に、当該の自然現象が及ぶ範囲が明示されることになる。そのとき同時に、V1の意味の強化も加わることになる。[照りつける、照らしつける、吹きつける]がこの類に該当する。

V1の文型:[モノ]が自然現象Vする

- (90) a. よく晴れて、真夏のようにきびしい日差しが(地面に)照りつける。

(朝日, 1999.05.28)

- b. よく晴れて、真夏のようにきびしい日差しが照る。

- c. *よく晴れて、真夏のようにきびしい日差しがつける。

4.3.2.8.行為強化:[モノ]を「V つける」

この類の前項動詞は当該動作の働きかける対象を示す「ヲ格」は取るが、「ニ格」を取ることはない他動詞である。この類の前項動詞に「ーつける」が後接されると、V1の意味が強化されることになる。なお、「ニ格」が出現することはない。この類には[踏みつける、はねつける、殴りつける、蹴りつける、撫でつける、煎つける、煮つける、締めつける、押さえつける/燃しつける、焚きつける]などの複合動詞がある。

V1の文型:[モノ]を働きかけVする

- (91) a. 塩分を普通一五%含むしょうゆで濃く煮付けるすき焼きなら、同量でもっと多くなるからほかの食事で調整するなど注意が必要だ。

(朝日, 1999.02.22)

- b. 塩分を普通一五%含むしょうゆで濃く煮るすき焼きなら、……省略。

- c. *塩分を普通一五%含むしょうゆでつけるすき焼きなら、……省略。

- (92) a. 好景気が必ずしも雇用につながらない大量失業時代を迎え、失業や雇用の対策をめぐる支出が国の財布を締め付ける。(朝日, 1999.02.23)

- b. 省略……、失業や雇用の対策をめぐる支出が国の財布を締める。

- c. *省略……、失業や雇用の対策をめぐる支出が国の財布をつける。

(91b)「煮る」(92b)「締める」にしても意味は通じるが、(91c)(92c)「つける」だけでは当該の複合動詞全体の意味は通じない。このことから、この類の複合動詞全体の中核的意味はV1だと考えられる。

4.3.2.9.加害強化:[人]を「Vつける」

この類の前項動詞は、動作主が「ヲ格」で示される相手に対して何らかのネガティブな行為を加えることを表す他動詞である。この他動詞自体は「ニ格」を要求しないが、相手に対して何らかの害を及ぼすという点を考慮するならば、【行為接着】の一種と考えることもできるだろう。この類の前項動詞に後接した「一つける」は前項動詞の意味を【強調】することになる。なお、「一つける」が後接されても「ニ格」が出現することはない。[怒りつける、脅かしつける、叱りつける、どやしつける、睨みつける、怒鳴りつける、責めつける、痛めつける、構いつける]等がこの類に該当する。

V1の文型:[人]を加害Vする

- (93) a. 忙しい夕食時、四歳の末息子がいたずらをしたので、しかりつけると、エプロンの端をひっぱり「しょーたのこと好きって言って」と繰り返す。

(朝日, 1999.08.08)

- b. 忙しい夕食時、四歳の末息子がいたずらをしたので、しかると、…省略。
c.*忙しい夕食時、四歳の末息子がいたずらをしたので、つけると、…省略。

(93a) 複合動詞「しかりつける」は(93b)の本動詞を受け継いでいると解釈される。
(93a)「しかりつける」を(93b)「しかる」にしても意味は通じるが、(93c)「つける」だけでは当該の複合動詞全体の意味は通じない。したがって、複合動詞全体の中核的意味はV1だと考えられる。

4.3.2.10.認知的発見:[モノ・コト]を「Vつける」

この類の前項動詞は知覚対象を示す「ヲ格」名詞を取るが、これに「一つける」が後接されると、その知覚対象を新たに発見、認識したといった意味が加わる。本研究では、この類が「一つける」に前置した場合の意味を【認知的発見】と呼ぶことにする。なお、【認知的発見】の複合動詞「Vつける」は「ニ格」を要求しない。「嗅ぎつける、聞きつける、見つける」がこの類に該当する。以下の例文に明らかなように、この類においても、複合動詞全体の中核的意味はV1が示している。

V1の文型:[モノ・コト]を知覚Vする

- (94) a. 地域や受験科目、学科の系統などの項目で検索し、受かりそうなところ
を見つける。(朝日, 1999.03.08)
- b. 省略…、学科の系統などの項目で検索し、受かりそうなところを見る。
- c. *省略…、学科の系統などの項目で検索し、受かりそうなところをつける。

4.3.2.11.まとめ

以上、本章では姫野(1999)の「Vつける」の意味分類に検討を加え、複合動詞におけるV1とV2意味に関して観察した。その結果は以下のようにまとめられる。

姫野(1999)は当該複合動詞全体が「ニ格」を取る可否により、本動詞「つける」の本義である「接着」の引き継ぎが決定されるとしている。そして複合動詞全体が【接着場所】を示す「ニ格」を取る場合は「接着」の意味が現れるとしている。しかし、本研究で考察の結果、「Vつける」が「ニ格」を取っても、V1 が格支配に優先している場合があり、このときV2 はV1 の【強調】の意味用法を持つ。複合動詞が「ニ格」を取り

ながら【強調】の意味で現れる場合は、V2 の「接着」の意味が希薄になり、抽象的な接着とし、「二格」を取らない【強調】用法と区別する。

〈表 4〉「Vつける」の「二格」支配と意味用法

複合動詞の意味	複合動詞の格	「二格」支配の可否		V1の意味	V2「一つける」の意味
		V1	V2		
物理的接着	二格を取る	○	○	仕方・様相	接着
接着指向		○	○	働きかけ(方向性)	強調
対人行為接触		○	○	行為接触	強調
設置・装着		×	○	創りあげ	接着
接触強化		○	○	働きかけ(接触)	強調
到達	二格を取らない	×	○	移動	到達
抽象的接着		×	○	自然現象	強調
行為強化		×	○	働きかけ	強調
加害強化		×	○	加害	強調
認知的発見		×	○	知覚	発見

・「Vつける」が【接着場所】を取る場合は、V1 の性格により次のように細分化される。

- (i) 前項動詞が【接着場所】を表す「二格」名詞を取って、【接着場所】が【モノ】で示された場合([モノ]を[モノ]にV1)は、V1を【接着動詞】とする。このとき、複合動詞全体の格支配はV1とV2の両方から引き継がれているもので、V2の接着様相により、V1の接着様相が強くなり、「Vつける」は「**V1の仕方をして接着する**」という意味用法を持つ。
- (ii) 前項動詞が【接着場所】を表す「二格」名詞を取って、【接着場所】が【人】で示された場合([モノ]を[人]にV1)は、V1を【行為接触動詞】とする。このとき、複合動詞全体の格支配はV1から引き継がれ、V2はV1の行為接触を強調することになり、「Vつける」は「**V1の対人行為を強調する**」という意味用法を持つ。

つ。

(iii) 前項動詞が【接着場所】を取らない場合([モノ]をV1)は、V1が「生産」を表すグループと「接触」を表すグループに分かれる。両方とも「V1の仕方をして**接着する**」の意味を表すが、「接触」のV1と結びついた「Vつける」は「二格」を取らない場合もあり、そのときは「V1を【強調】する」という意味になる。

(iv) 前項動詞が【接着場所】を取らない場合([交通手段]をV1)は、前項動詞が動作主の交通手段の利用あるいは動作主の移動・運動を表す。このとき、複合動詞の格はV2により支配され、「V1の仕方**で【到達】する**」という意味になる。

(v) 前項動詞が【接着場所】を取らない([モノ]がV1)のV1は、【自然現象】を表すもので、複合動詞全体はV2の格支配を受けているが、V1の自然現象を強くする意味になる。

・「Vつける」が【接着場所】を取らない場合も、V1の性格により次のように細分化され、V2はV1の意味を【強調】することになる。

4.3.3. 語彙的複合動詞「Vつく」「Vつける」のまとめ

語彙的複合動詞「Vつく」「Vつける」をその前項動詞の性質と複合動詞全体の格支配関係に従い、考察を行った結果、大きく「二格」を取るグループと取らないグループに分かれる。「二格」を取るグループは、その「二格」が前項動詞によって要求されたのか、それとも「一つく」「一つける」によって要求されたのかにより、また二つに分けられる。そして、その「二格」が前項動詞に要求されたものの場合、複合動詞全体の意味は【強調】になっていることが多い。一方、「二格」を必要としないグループの複合動詞全体の意味もV1の【強調】になっていることが多い。従って、複合動詞全体の「二格」が「一つく」「一つける」によるものであれば、その本動詞「つく」「つけ

る」の中核的意味である【接着】の意味が複合動詞全体に引き継がれ、V1は【接着】の仕方や様相を表すことになる。

- ・ 「Vつく」「Vつける」の意味用法は、次のようにまとめられる。

「Vつく」の意味用法	「Vつける」の意味用法
物理的接着	物理的接着
接着指向	接着指向
接着強化	対人行為接触
対象指向	設置・装着
到着	接触強化
定着	到達
完全化	抽象的接着
着想	行為強化
-	加害強化
-	認知的発見

4.4.語彙的複合動詞「Vつく」「Vつける」の対応

本節では語彙的複合動詞「Vつく」「Vつける」の対応関係を考察していく。本動詞「つく」「つける」は以下のように接着対象が無生である場合に限り、両者の間に自他の対立関係が成立していることを確認した。(C=動作主、A=移動対象、B=接着場所)

- (95) a. AがBについた。
 i) 泥がズボンについた。(A=モノ)

- ii) 太郎が駅についた。(A=人)
- b. CはAをBにつけた。
 - i) 太郎が泥をズボンにつけた。(A=モノ)
 - ii) *花子が太郎を駅につけた。(A=人)

(95a i)(95b i)のように接着対象がモノである場合は、自他の対応関係が成立しているが、(95a ii)(95b ii)のように接着対象が人である場合は、自他の対応関係が成立しない。それでは、「つく」「つける」を後項要素とする「Vつく」と「Vつける」の間にも同様の対応が成立するのだろうか。「Vつく」「Vつける」の意味用法のうち、意味的に類似した「到着」(Vつく)、「到達」(Vつける)は必ずしも自他対応が成立するわけではない。例えば、「行きつく」「行きつける」の例を参照されたい。

- (96) a. 私はやっとそこに行きついた。
- b. 私はやっとそこに行きつけた。

(96b)の例は非文ではないが、この「行きつける」の場合、「行きつく」の可能用法になり、(96b)は「やっとそこに行きつくことができた」と解釈されることになる。従って、(96b)「行きつける」は「行きつく」の自他対応関係にある「*行きつける」ではないのである。

次に「到着」のグループと「到達」のグループの対応関係を示す。

- 「到着」 行きつく、帰りつく、走りつく、泳ぎつく、辿りつく、流れつく、
*乗りつく、*駆けつく、*馳せつく、*漕ぎつく
- 「到達」 乗りつける、駆けつける、馳せつける、漕ぎつける、*行きつける、
*帰りつける、*走りつける、*泳ぎつける、*辿りつける、*流れつける

具体的な例を見ると次のようである。

- (97) a. 小舟が岸に辿りついた。
b. *太郎は小舟を岸に辿りつけた。
- (98) a. 船が岸に流れついた。
b. *太郎は船を岸に流れつけた。

(97)(98)は(95a i)(95b i)に対応する例で、このように接着対象がモノである場合、「つく」「つける」は自他の関係になる。しかし、「辿りつく」「流れつく」では、接着対象がモノであるにも関わらず、「*辿りつける」「*流れつける」は非文になる。この理由を考える際には、「辿りつく」の「辿る」、「流れつく」の「流れる」というV1の機能と意味を考慮しなければならない。

「辿りつく」「流れつく」におけるV1はV2の「つく」を修飾する機能を持っている。つまり、どのような仕方・方法で「つく」のかを示しているわけである。しかし、(97b)(98b)動作主「太郎」は移動対象「小舟」「船」の到着の仕方・方法をコントロールできない。その結果、「*辿りつける」「*流れつける」との対応関係が成立しないのである。

次に「駆けつける」「馳せつける」の例を参照されたい。

- (99) a. 太郎が車をそこにつけた。
b. 車がそこについた。
c. *太郎が車をそこに駆けつけた。
d. *太郎が車をそこに駆けついた。
e. 太郎が車でそこに駆けつけた。
f. 太郎がそこに駆けつけた。

- g. ?太郎がそこに駆けついた。
- (100) a. 太郎が車をそこにつけた。
b. 車がそこについた。
c. *太郎が車をそこに馳せつけた。
d. *太郎が車をそこに馳せついた。
e. 太郎が車でそこに馳せつけた。
f. 太郎がそこに馳せつけた。
g. ?太郎がそこに馳せついた。

(99)(100)から、「駆けつける」「馳せつける」は「一つける」という他動詞形を一部に含むものの、(99c)(100c)から、これらの語彙的複合動詞自体には「ヲ格」を取るといった他動詞的性質はないと考えられる。つまり、「駆けつける」「馳せつける」はこれ全体で自動詞になっているため、これらには対応する自動詞が存在しないということである。

一方、「駆けつける」「馳せつける」における接着対象は主語が示す人自身であり、その結果、これらの動詞は一種の再帰動詞と見なされる。このことを「駆けつける」を例にして分析すると、(101a)のようになる。

- (101) a. 太郎は[自分自身を]そこに駆けつけた。
b. *太郎は車を[自分自身を]そこに駆けつけた。
c. 太郎は車で[自分自身を]そこに駆けつけた。

「駆けつける」の移動対象(接着対象)は、主語と同一人物なので、表面的には省略されることになる。言い換えると(101b)が非文になるのは、接着対象が「車を」「自分自身を」のように重複するからであり、(101c)が自然なのは、「自分自身を」は接着

対象、「車で」は接着手段というようにそれぞれ異なる機能を示すことになるからなのである。

以上、「Vつく」の「到着」用法と「Vつける」の「到達」用法を比較したが、意味用法としては対応しているにもかかわらず、自他においては対応関係が見られないことが分かった。このことから、当該複合動詞の自他対応は本動詞のように接着対象の無生・有生によっては説明できないと言える。

4.5.統語的複合動詞「Vつけている」

統語的複合動詞というのは日本語の文法構造のなかでも中枢に位置づけられる重要なテーマであり、語彙的複合動詞とは異なる様々な統語現象が絡んでくることは4.2節で確認した。本節では統語的複合動詞と判断された習慣用法の「Vつけている」の特徴をそれと意味的に類似した「V慣れる」と比較対照させながら明らかにしていく。

4.5.1.統語的複合動詞としての「V慣れる」

『広辞苑』(2006)に記載されている「V慣れる」11語(言い慣れる、書き慣れる、聞き慣れる、来慣れる、着慣れる、し慣れる、住み慣れる、使い慣れる、乗り慣れる、見慣れる、読み慣れる)を対象に、影山(1993)の統語テストを次のように行うことにする。

(102) 「受身」テスト: 太郎はこのPCを使い慣れている。

- a. *このPCは太郎に使われ慣れている。
- b. *このPCは太郎に使いなられている。

(103) 「そうする」テスト:a. 太郎は会社のPCを使い慣れている。

b. 次郎もそうし慣れている。

影山(1993)の統語テストに従うならば、(102)の「受身」テストでは、「Vつけている」が無生の場合に不自然に感じられたのと同じ現象が起こり、二分類の判断は難しいが、(103)「そうする」への置換は可能であり、「V慣れる」は統語的複合動詞と認められる。4.5.2節では統語的複合動詞と判断された「V慣れる」と習慣用法の「Vつけている」を比較した先行研究を紹介する。

4.5.2.統語的複合動詞「Vつけている」と「V慣れる」の先行研究

姫野(1999:118)は、本研究の言う統語的複合動詞「Vつけている」の類義表現として「V慣れる」をあげ、それはほとんどの場合「Vつけている」に置き換え可能だと述べている。姫野によれば、当該の統語的複合動詞「Vつけている」は何度もその行為を繰り返して慣れている、なじんでいることを示すという。また、その前項動詞は、「繰り返しのきく意志的行動で、日常生活に関係のある語が多いが、人生において一度限りと(通常は)されている「結婚する」や「死ぬ」等、同一の対象については繰り返しを前提としない行為「知る」、「愛する」などには結合しない」、と指摘している。

『日本語使い分け辞典』(2001)によれば、「一つける」は、(104)～(106)のように「いつもしていることだ・ふだんからしていることだ」を示す。また「行きつけの店・かかりつけの医者」の場合は、本人の意志で選んだという意識を含み、「いつも行くことに決めている」という意味で使われる、という。

(104) 彼は持ちつけない大金をもったばかりに、人が変わってしまった。

(105) ふだんやりつけない運動をしたので、体じゅう痛くてたまらない。

(106) 日ごろ使いつけない敬語を使うと、まちがえて恥をかくことになる。

このように統語的複合動詞の後項要素「一つけている」は、本義にはない「繰り返す」という意味を持つ。また、「ふだん」、「日ごろ」のような副詞を伴って当該の行為が日常的にしている特別な行為ではないことを示す。

一方、「一慣れる」は、(107)～(110)のように、主語である人が何度もの経験を通し、当該の行為に「熟練した・身についた・なじんでいる・抵抗感や違和感がなくなる」ことを意味する。また「一慣れる」は、(111)、(112)のように「住み慣れた町・はき慣れた靴」などの名詞を修飾すると、安心していたりなじんだりしている状態を表す、という。

(107) ぜいたくな料理より、食べ慣れた家庭料理のほうがいい。

(108) この道は学生のころから通い慣れているので、目をつぶっても歩けるくらいです。

(109) 旅慣れている人は、荷物が少ない。

(110) 玄関に見慣れない靴がある。だれが来ているのだろう。

(111) 住み慣れた町を離れるのはさびしい。

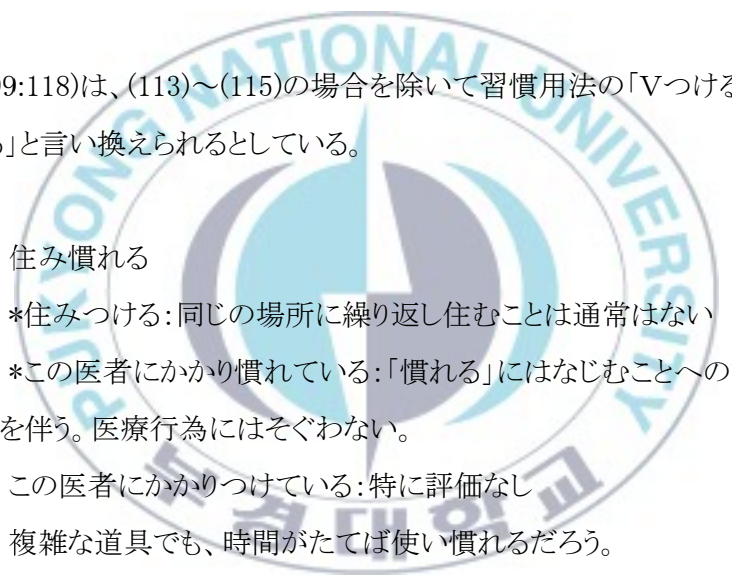
(112) はき慣れない靴で出かけたら、靴ずれができてしまった。

森田(1977:362)によると「一慣れる」は、「他の意志的な動詞に付いて、その動作を始終行った結果、対象に順応し、具合のよい状態となる意を添える」のに対して、「一つける」は、「たびたび行われた結果、行為そのものにやり慣れるという点では「一慣れる」に類似しているが、「一慣れる」のように対象への順応意識はない」、としている。例えば、「一慣れる」では、「歩き慣れた道、使い慣れた万年筆、呼び慣れた名前」のように、被修飾語にとって「自分が慣れた状態にある」と言うことをその対象の属性として表すことができるが、影山(1993:158)によれば、「一つける」は当該行為に慣れることを示すことから、「？歩きつけた道、？使いつけた万年筆」というのは

不自然になると言う。このように習慣を表す「一つける」と「一慣れる」の意味用法に関する先行研究はあるが、本研究では文末の述語としての「一つける」と「一慣れる」に注目して考察を行うことにする。また、実際の両形式の置換可能性は複雑なため両者のより詳細な統語的性質と意味用法の類似点と相違点の観察・分析が必要である。以下では、まず「一つける」と「一慣れる」との統語的類似点と相違点から見ていくこととする。

4.5.3.「Vつけている」と「V慣れる」の類似点と相違点

姫野(1999:118)は、(113)～(115)の場合を除いて習慣用法の「Vつける」の大部分を「V慣れる」と言い換えられるとしている。

- 
- (113) a. 住み慣れる
b. *住みつける: 同じの場所に繰り返し住むことは通常はない
- (114) a. *この医者にかかり慣れている: 「慣れる」にはなじむことへのプラス評価を伴う。医療行為にはそぐわない。
b. この医者にかかりつけている: 特に評価なし
- (115) a. 複雑な道具でも、時間がたてば使い慣れるだろう。
b. *複雑な道具でも、時間がたてば使いつけるだろう。

ここでは、「V慣れる」と4.2節で統語的複合動詞と判断された習慣用法の「Vつけている」の用法の類似点と相違点を明らかにするために、まず、「Vつけている」と「V慣れる」の置換の可否を見、その後、先に見た影山(1993)の「そうする」への置換の可否および前項動詞の「受身形」の可否といった統語テストを通し、習慣用法の「Vつけている」と「V慣れる」の類似点と相違点を明らかにしていく。なお、以下で扱う

習慣用法の「Vつける」は「Vつけている」という「ーている」形式で表される文末終止形だけとし、連体修飾中の形式は取り扱わない。

4.5.3.1.「そうする」への置換の可能性から見た「Vつけている」と「V慣れる」

- (116) a. 「Vつけている」: 太郎は普段から髪を染めつけている。
「そうする」: 次郎もそうしつけている。
b. 「V慣れる」: 太郎は普段から髪を染め慣れている。
「そうする」: 次郎もそうし慣れている。

本節では「そうする」への置換可能性から「Vつけている」と「V慣れる」の類似点と相違点を考察していく。次の例を参照されたい。

- (117) a. 太郎は普段から外車を乗りつけている。
a'. 次郎もそうしつけている。
b. 太郎は普段から外車を乗り慣れている。
b'. 次郎もそうし慣れている。
(118) a. 太郎は普段から納豆を食べつけている。
a'. 次郎もそうしつけている。
b. 太郎は普段から納豆を食べ慣れている。
b'. 次郎もそうし慣れている。

(117a)「乗りつけている」、(118a)「食べつけている」は、3.2節で「そうする」への置換テストに従い統語的複合動詞と認められたものであるが、「V慣れる」に置き換えた(117b)「乗り慣れている」、(118b)「食べ慣れている」も「そうする」への置換テストを行

った結果、統語的複合動詞と判断される。しかし、必ずしも、すべての「V慣れる」が「そうする」への置換が可能になるわけではない。次の例を参照されたい。

- (119) a. 太郎は普段から槍を突きつけている。
a'. 次郎もそうしつけている。
b. 太郎は普段から槍を突き慣れている。
b'. 次郎もそうしつけている。
- (120) a. 太郎は普段から食事の時ひじを突きつけている。
a'. 次郎もそうしつけている。
b. ??太郎は普段から食事の時ひじを突き慣れている。
b'. ??次郎もそうし慣れている。

(119a)「突きつけている」は(119b)「突き慣れている」に言い換えられるが、同一語形であるにも関わらず、(120a)を(120b)に言い換えると不自然に感じられる。それは(119)の「槍を突く」が主体の意図によって行われる行為なのに対し、(120)「ひじを突く」という行為は自発的に行われるものであり、主体がその行為に「慣れる」必要がないからである。以下の(121)～(123)も(120)と同様で、「花子を怒鳴る」「息子をどやす」「下級生を脅かす」は、当該行為を行うために、主体は特別その行為に「慣れる」必要ない。「怒鳴る」「どやす」「脅かす」のような行為は、主体の感情発露に基づく行為だからである。

- (121) a. 太郎は普段から花子を怒鳴りつけている。
a'. 次郎もそうしつけている。
b. ??太郎は普段から花子を怒鳴り慣れている。

b'. ??次郎もそうし慣れている。

(122) a. 太郎は普段から息子をどやしつけている。

a'. 次郎もそうしつけている。

b. ??太郎は普段から息子をどやし慣れている。

b'. ??次郎もそうし慣れている。

(123) a. 太郎は普段から下級生を脅かしつけている。

a'. 次郎もそうしつけている。

b. ??太郎は普段から下級生を脅かし慣れている。

b'. ??次郎もそうし慣れている。

(124a)(124b)は「そうする」への置換が不可能である。それはいわゆる「習慣」の主体は原則として意志性を持つ有生と考えられるからである。言い換えると、V1は「習慣」として認められる意志性動詞でなければならない。

(124) a. その部屋には普段から西日が照りつけている。

a'. *日差しが地面にそうしつけている。

b. *その部屋には普段から西日が照り慣れている。

b'. *日差しが地面にそうし慣れている。

一方、「そうする」への置換が困難な(124a)は語彙的複合動詞と判断されるが、(124b)「*照り慣れる」は語彙的複合動詞とは判断されない。それが「Vつけている」と「V慣れる」の相違点であり、「V慣れる」は習慣用法しかないのに対し、「Vつけている」には「ーている」による習慣用法と、非習慣の継続用法の二つの用法が存在するのである。

- (125) a. 太郎は普段から上司のアドバイスを受けつけている。
a'. 次郎もそうしつけている。
b. ??太郎は普段から上司のアドバイスを受け慣れている。
b'. ??次郎もそうし慣れている。
c. 太郎は普段からマッサージを受け慣れている。
c'. 次郎もそうし慣れている。
d. 太郎は普段から面接を受け慣れている。
d'. 次郎もそうし慣れている。
- (126) a. 太郎は普段から誕生日には花子に花束を送りつけている。
a'. 次郎もそうしつけている。
b. ??太郎は普段から誕生日には花子に花束を送り慣れている。
b'. ??次郎もそうし慣れている。

(125a)「受け付けている」、(126a)「送りつけている」は習慣用法として自然であるのに対し、(125b)「受け慣れている」、(126b)「送り慣れている」は不自然になる。しかし、(125c)(125d)のように目的語が「マッサージ」や「面接」などの場合は自然に感じられる。それは、「アドバイスを受ける」はアドバイスを与える人の意志に左右されるのに対し、「マッサージを受ける」や「面接を受ける」は主体の意志に左右されるものだからである。換言すれば、「V慣れる」の場合、主体の意志性に従い、「そうする」への置換可能性が異なってくるということである。

4.5.3.2.「受身」への置換の可能性から見た「Vつけている」と「V慣れる」

- (127) a. 「Vつけている」：太郎は普段から髪を染めつけている。
「受身」：*花子の髪は普段から太郎に染められつけている。

b. 「V慣れる」: 太郎は普段から髪を染め慣れている。

「受身」: *花子の髪は普段から太郎に染められ慣れている。

本節では、(127)のような、「受身」への置換可能性から「Vつけている」と「V慣れる」の類似点と相違点を考察していく。次の例を参照されたい。

(128) a. 太郎は普段から部下を叱りつけている。

a'. 部下は太郎に叱られつけている。

b. 太郎は普段から部下を叱り慣れている。

b'. 部下は太郎に叱られ慣れている。

(129) a. 太郎は普段から次郎をガリレオと呼びつけている。

a'. 次郎は太郎にガリレオと呼ばれつけている。

b. 太郎は普段から次郎をガリレオと呼び慣れている。

b'. 次郎は太郎にガリレオと呼ばれ慣れている。

(130) a. 太郎は普段から娘の髪を切りつけている。

a'. *娘の髪は普段から太郎に切られつけている。

b. 太郎は普段から娘の髪を切り慣れている。

b'. *娘の髪は普段から太郎に切られ慣れている。

(128)～(130)は「Vつけている」と「V慣れている」の置換が可能であるが、(128)(129)に対し(130)は、「受身」への置換が不可能である。それは、「受身」の主語が無生だからである。つまり、(130)の不自然さは、日本語の自然な「受身」の主語は基本的に有生である、という制約に従ったものなのである。

一方、「そうする」への置換テストで観察したように、「怒鳴りつけている」「どやしつけている」「脅かしつけている」の「?怒鳴り慣れる」「?どやし慣れる」「?脅かし慣れる」

への言い換えは不自然であるが、「V慣れる」の「受身」への言い換えは自然である。
次の例を参照されたい。

- (131) a. 太郎は普段から花子を怒鳴りつけている。
a'. 花子は普段から太郎に怒鳴られつけている。
b. ??太郎は普段から花子を怒鳴り慣れている。
b'. 花子は普段から太郎に怒鳴られ慣れている。
- (132) a. 太郎は普段から息子をどやしつけている。
a'. 太郎の息子は普段から太郎にどやされつけている。
b. ??太郎は普段から息子をどやし慣れている。
b'. 太郎の息子は普段から太郎にどやされ慣れている。
- (133) a. 太郎は普段から下級生を脅かしつけている。
a'. 下級生は普段から太郎に脅かされつけている。
b. ??太郎は普段から下級生を脅かし慣れている。
b'. 下級生は普段から太郎に脅かされ慣れている。

4.5.3.3.「Vつけている」と「V慣れる」の置換の可能性:まとめ

上では、習慣の「Vつけている」と「V慣れる」の置換の可能性を観察した。(134)=(17)の例を見られたい。

- (134) a. 太郎は普段から外車に乗りつけている。
b. 太郎は普段から外車に乗り慣れている。

習慣用法の「Vつけている」と「V慣れる」の多くは上の(134)のように互いに置き換

えることが可能であるが、中には次の例のように、置換が困難な場合もあった。

- (135) a. 太郎は普段から花子を怒鳴りつけている。
b. ??太郎は普段から花子を怒鳴り慣れている。
- (136) a. 太郎は普段から息子をどやしつけている。
b. ??太郎は普段から息子をどやし慣れている。
- (137) a. 太郎は普段から下級生を脅かしつけている。
b. ??太郎は普段から下級生を脅かし慣れている。

習慣用法として「怒鳴りつけている」「どやしつけている」「脅かしつけている」は自然であるが、「怒鳴り慣れている」「どやし慣れている」「脅かし慣れている」は不自然である。「一慣れる」が不自然と解釈されるのは、V1が主体(＝主語)の強い意図性に基づくものであることに因る。「慣れる」というのは、主体が経験したことのなかったこと、また、触れたことのなかった対象について主体がその経験を繰り返す、あるいは、その対象に何度も触れることにより、その経験、対象について主体が違和感を持たなくなることを意味する。つまり、「怒鳴る」「どやす」「脅かす」といった動詞の表す行為は、改めて「慣れる」必要がなく、主体がそうしたいと思えば、いつでもそれが可能になるものであることから、「慣れる」と結合すると不自然に感じられるのである。このように習慣用法の「Vつけている」は必ずしも「V慣れている」に置き換えられるわけではない。それが可能になるのはV1の表す事態が、一般的知識として「慣れる」という動詞の意味するところと整合性のあるものに限られる。

また、「V慣れる」に置換できない「Vつけている」には以下のようなものもあった。

- (138) a. 太郎は普段から娘の髪を切りつけている。
b. 太郎は普段から娘の髪を切り慣れている。

(139) a. その部屋には普段から西日が照りつけている。

b. *その部屋には普段から西日が照り慣れている。

(138a)「切りつけている」は(138b)「切り慣れている」に言い換えられるが、(139a)「照りつけている」は(139b)「照り慣れている」には言い換えられない。それは、V1の意味特徴に因るものであり、(138)「切る」は意図的な行為を示す動詞であるが、(139)「照る」の主語は例文が示すように自然現象であるのが普通で、意図的な行為を示さない。したがって、主体の意図性を前提とする「一慣れている」とは結びつかないのである。

さらに、以下の「Vつけている」も「V慣れる」には置換できなかった。

(140) a. 太郎は普段から上司のアドバイスを受けつけている。

b. ??太郎は普段から上司のアドバイスを受け慣れている。

b'. 太郎は普段からマッサージを受け慣れている。

b''. 太郎は普段から面接を受け慣れている。

(141) a. 太郎は普段から誕生日には花子に花束を送りつけている。

b. ??太郎は普段から誕生日には花子に花束を送り慣れている。

(140a)「受け付けている」、(141a)「送りつけている」は習慣用法として自然であるのに対し、(140b)「受け慣れている」、(141b)「送り慣れている」は不自然である。しかし、(140b')(140b'')のように目的語が「マッサージ」や「面接」などの場合は自然になる。これは、「アドバイスを受ける」はアドバイスを与える人の意志に左右されるのに対し、「マッサージを受ける」や「面接を受ける」は主体(=主語)の意志さえ保証されれば「慣れる」ことが可能になるため、置換が可能になるのだと思われる。このように、「Vつけている」と「V慣れる」の置換の可否には、動詞の目的語の性質が関与してくるこ

とがある。

4.5.3.4. 語形成から見た習慣用法の「Vつけている」と「V慣れる」

最後に、「Vつけている」と「V慣れる」の語形成上の違いが、これら二形式の置換の可否に影響を与えるのを見てみたい。

習慣用法の「Vつけている」と「V慣れる」は、習慣の意味の出所が異なっている。「Vつけている」は、継続相のアスペクト形式「ーている」の反復用法から派生したものであるのに対し、「V慣れる」は「慣れる」という動詞の意味に基づいたものである。このような「Vつけている」と「V慣れる」の構造および意味上の違いは、共起する副詞句の違いに現れる。次の例を参照されたい。

- (142) a. 太郎はそれをだんだん使い慣れている。
b. *太郎はそれをだんだん使いつけている。

漸次的な変化を示す副詞「だんだん」との共起の可能性がその一つで(142)の「だんだん」という副詞との共起の可否は、「慣れる」と「つける」の語彙アスペクトの違いによるものと思われる。「慣れる」はそれ自体漸次的変化を示すが、「つける」はそうではない。「だんだん」以外にも、「おいおい(と/に)、漸次、徐々に、次第に」等のように時間の中における事態の進展³¹⁾の副詞と「慣れる」は共起できるが、「つける」とは共起できない。一方、習慣用法の「Vつけている」は連体修飾節を除いては「ている」形を取るが、「V慣れる」の場合は、必ずしもすべてが「ている」形を取るというわけではない。次の例を参照されたい。

³¹⁾ <時間の中における事態の進展を表す副詞>の副詞とは、時間の展開に従って進展していく事態の進展のあり様、そして、そのことを通して、事態の進展の時間的あり方を表すものである。Cf. 仁田義雄(2002), p. 241.

- (143) a. 太郎がやつとそれを使い慣れたとき、また別のPCをあてがわれた。
b. *太郎がやつとそれを使いつけたとき、また別のPCをあてがわれた。

(143)の例から分かるように、「V慣れる」の場合、「た形」を取ることができるが、「Vつける」はできない。姫野(1999)は「Vつける」の習慣用法において「ーている形」が要求されるのは、そのアスペクトに因る、と述べているが、もし「習慣」という意味が「ーている」に結びついたものならば、同じく習慣の意味を表す「V慣れる」も「ーている形」を要求するはずである。しかし、(143)の「V慣れる」は「ーた形」を取っている。以上の違いも、また、習慣用法の「Vつけている」は「ーている」形が示す反復用法から派生したものであるため「ーている」形の出現が必須であるが、「V慣れる」は「慣れる」という語彙の意味に基づくものであることに因る。それゆえ、「V慣れる」は「ーている」形のみならず「ーた」形を取ることのできるものである。

5. おわりに

以上、本研究では複合動詞「Vつく」「Vつける」の意味用法を考察してきた。本研究では、まずこの2つの複合動詞の異同を考察するにあたり、影山(1993)の統語テストを利用し、それぞれが統語的複合動詞か語彙的複合動詞のどちらに属するものかを判断した。その結果は、次のようにまとめられる。

「Vつく」と「Vつける」の統語テスト結果³²

³² 本研究〈表 2〉の再引用

	「そうする」による置換	前項動詞の受身	複合動詞全体の受身
Vつく	×	×	×*
Vつける	×	×	○*
①Vつけている	○	○*	×
②Vつけている	×	×	○*

〈表2〉から、「Vつく」は語彙的複合動詞と判断されるが、「Vつける」は、「ーている」形式になると、語彙的複合動詞と解釈される場合と統語的複合動詞と解釈される場合があることが明らかになった。「Vつけている」が統語的複合動詞と解釈される場合は、後述する、いわゆる「Vつけている」の習慣用法である。

語彙的複合動詞と判断された「Vつく」「Vつける」は、その前項動詞の性質と複合動詞全体の格支配関係に従い、大きく二つのグループに分かれた。

「二格」を取るグループは、その「二格」が前項動詞によって要求されたのか、それとも「ーつく」「ーつける」によって要求されたのかにより、また二つに分けられる。そして、その「二格」が前項動詞に要求されたものの場合、複合動詞全体の意味は【強調】になっていることが多かった。

一方、「二格」を必要としないグループの複合動詞全体の意味もV1の【強調】になっていることが多かった。従って、複合動詞全体の「二格」が「ーつく」「ーつける」によるものであれば、その本動詞「つく」「つける」の中核的意味である【接着】の意味が複合動詞全体に引き継がれ、V1は【接着】の仕方や様相を表すことになる。以上の「Vつく」「Vつける」の意味用法は、次のようにまとめられる。

- ・「Vつく」：物理的接着/接着指向/接着強化/対象指向/到着/定着/完全化着想
- ・「Vつける」：物理的接着/接着指向/対人行為接触/設置・装着/接触強化/到達/
抽象的接着/行為強化/加害強化/認知的発見

最後に、統語的複合動詞と解釈される習慣用法の「Vつけている」を同じく習慣を表す「V慣れる」と比較対照した。その結果、「Vつけている」の習慣用法は、アスペクト形式「ーている」が示す当該事態の「反復用法」に基づくものであるのに対し、「V慣れる」は「慣れる」という後項動詞の意味に基づくものであることが確認され、これら二形式に見られる異同は基本的に、この構造および意味上の違いに基づくものであることが明らかになった。すなわち、「Vつけている」の習慣用法の可否は前項動詞が示す事態が一般的常識と照らし合わせてみて「習慣」と認識されるか否かに依拠するが、「V慣れる」の可否は、「慣れる」という動詞が持つ本来の意味との整合性に依る、ということである。このように考えれば、例えば、「太郎は次郎を怒鳴りつけている」が可能なのは、「怒鳴る」というのがある主体において習慣的に行われる行為と世間知的に解釈されうるからであり、一方、「*太郎は次郎を怒鳴り慣れている」が不自然なのは、「怒鳴る」が、通常、主体(＝主語)の意図とは別に自発的に生起する感情行為を示す動詞で、「慣れる」が求める「経験・体験」等によって漸次的に獲得される行為を示すものではないからである、と結論づけることができる。

参考文献

- 姫野昌子(1975)「複合動詞・『Vつく』と『Vつける』」『日本語学校論集』、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- (1999)『複合動詞の意味用法と構造』、ひつじ書房
- (2001)「複合動詞の性質」『日本語学』、明治書房

- 長嶋善郎(1976)「複合動詞の構造」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』、大修館書店
- (1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』第14分冊、早稲田大学語学教育研究所
- 山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」、『都大論究』21号
- 斉藤倫明(1984)「複合動詞構成要素の意味—単独用法との比較を通して—」『国語彙史の研究』
- (1985)「複合動詞後項の接辞化—「返す」の場合を対象として—」『国語学』140集
- 石井正彦(1984)「複合動詞の成立—V+Vタイプの複合名詞との比較—」『日本語学』
- (1988)「接辞化の一類型—複合動詞後項の補助動詞化—」『方言研究年報』30
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』、ひつじ書房
- (1996)『動詞意味論』、ひつじ書房
- 須賀一好・早津恵美子(1995)『日本語研究資料—集動詞の自他—』第1期第8巻、ひつじ書房
- 斉藤倫明・石井正彦(1997)『日本語研究資料集—語構成—』第1期第13巻、ひつじ書房
- 松本 曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114
- 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』、ひつじ書房
- 由本陽子(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語』、ひつじ書房
- 塚本秀樹(1993)「複合動詞と格支配—日本語と朝鮮語の対照研究—」『日本語の格

をめぐって』、くろしお出版

城田 俊(1993)「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐって』、くろしお出版

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』、くろしお出版

奥田靖雄(1983)「二格名詞と動詞の組み合わせ」『日本語文法・連語論』、むぎ書房

辞書

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、角川書店

泉原省二(1998)『類義語使い分け辞典』、研究社出版

広瀬正宜・庄司香久子(2001)『日本語使い分け辞典』、講談社

山口明穂・秋本守英(2001)『日本語文法大辞典』、明治書房

日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育事典』、大修館書店

新村出編(2006)『広辞苑』第五版、岩波書店

例文

朝日新聞—朝日

毎日新聞—毎日

『日本語基本動詞用法辞典』—日

作成例³³

コーパス

<http://www.sketchengine.co.uk/auth/>

³³ 出典が示されていない例文は作成例である。



〈付録 1〉 複合動詞「Vつく」「Vつける」の語彙リスト³⁴

³⁴ 姫野(1999)が取り上げている「Vつく」61語「Vつける」107語の中、前項要素が接頭辞化していたり、一般化していたりして分けられない語を除いた「Vつく」44語「Vつける」72語を対象とする。

「Vつく」(44語)

ア行きつく、居つく、凍てつく、追いつく、落ちつく、思いつく、泳ぎつく(7語)カ帰りつく、かじりつく、噛みつく、絡みつく、考えつく、食いつく、組みつく、食らいつく、凍りつく、焦げつく(10語)サ錆びつく、しがみつく、染みつく、吸いつく、縫いつく、住みつく(6語)タ抱きつく、辿りつく、飛びつく(3語)ナ流れつく、泣きつく、寝つく、粘りつく、登りつく(5語)ハ走りつく、貼りつく、へばりつく、吠えつく(4語)マ巻きつく、まつわりつく、結びつく、燃えつく(4語)ヤ焼きつく、焼けつく、病みつく、寄りつく(4語)フ煩いつく(1語)

「Vつける」(72語)

ア言いつける、痛めつける、煎りつける、植えつける、受けつける、打ちつける、生みつける、売りつける、送りつける、押さえつける、押しつける、落ちつける、脅かしつける、買いつける(14語)カ書きつける、駆けつける、貸しつける、構いつける、絡みつける、蹴りつける、聞きつける、刻みつける、切りつける、括りつける、漕ぎつける、擦りつける(12語)サ叱りつける、縛りつける、締めつける、吸いつける、据えつける、責めつける、備えつける、染めつける(8語)タ焚きつける、叩きつける、突きつける、作りつける、照りつける、照らしつける、怒鳴りつける、どやしつける、取りつける(9語)ナ殴りつける、投げつける、撫でつける、煮つける、睨みつける、縫いつける、塗りつける、寝かしつける、乗りつける(10語)ハ馳せつける、撥ねつける、貼りつける、引きつける、吹きつける、踏みつける、彫りつける(7語)マ巻きつける、見せつける、見つける、結びつける、申しつける、盛りつける、燃やしつける(7語)ヤ焼きつける、結わえつける、寄せつける、呼びつける、割りつける(5語)

〈付録 2〉「Vつく」の統語テスト

「そうする」への置換	「受身」可能性(V1受身／複合動詞全体受身)
太郎はようやく家に行き着いた。 *次郎もそうしつた。	*ようやく家が太郎に行かれつた。 *ようやく家が太郎に行きつかれた。

太郎は田舎に居ついた。 *次郎もそうしつた。	*田舎は太郎に居られつた。 *田舎は太郎にいつかれた。
この水道が凍てつた。 *あの水道もそうしつた。	*1項動詞 ³⁵
太郎は天才に生まれつた。 *次郎もそうしつた。	*1項動詞
太郎が父親に追いつた。(=追っつく) *次郎もそうしつた。	??父親は太郎に追われつた。 父親は太郎に追いつかれた。
太郎は落ちつた。 *次郎もそうしつた。	*1項動詞
太郎はいい方法を思いつた。 *次郎もそうしつた。	*いい方法が太郎に思われつた。 いい方法が太郎に思いつかれた。
太郎は近くの岸に泳ぎつた。 *次郎もそうしつた。	*近くの岸は太郎に泳がれつた。 *近くの岸は太郎に泳ぎつかれた。
太郎は故郷へ帰りつた。 *次郎もそうしつた。	*故郷は太郎に帰られつた。 *故郷は太郎に帰りつかれた。
犬が私(の指)にかじりつた。 *猫もそうしつた。	*私(の指)は犬にかじられつた。 私(の指)は犬にかじりつかれた。
犬が息子にかぶりつた。 *次郎もそうしつた。	*息子は犬にかぶられつた。 息子は犬にかぶりつかれた。
犬が太郎にかみつた。 *猫もそうしつた。	*太郎は犬にかまれつた。 太郎は犬にかみつかれた。
酔っ払いが太郎に絡みつた。(=絡まりつく) *次郎もそうしつた。	*太郎は酔っ払いに絡まれつた。 太郎は酔っ払いに絡みつかれた。
太郎はいいことを考えつた。 *次郎もそうしつた。	*いいことが太郎に考えられつた。 いいことが太郎に考えつかれた。
犬が魚にくいつた。 *猫もそうしつた。	*魚が犬にくわれつた。 魚が犬にくいつかれた。
太郎は先輩に組みつた。 *次郎もそうしつた。	*先輩は太郎に組まれつた。 先輩は太郎に組みつかれた。
犬が太郎に食らいつた。 *猫もそうしつた。	*太郎は犬に食らわれつた。 太郎は犬に食らいつかれた。
水道が凍りつた。 *身がそうしつた。	*1項動詞
ご飯が鍋の底に焦げつた。 *魚もそうしつた。	*鍋の底はご飯に焦げられつた。 *鍋の底はご飯に焦げつかれた。

³⁵ 1項動詞の文は受身にならない。

ご飯粒がお茶碗にこびりついた。 *濡れたのりもそうしついた。	*お茶碗は飯粒にこびられついた。 *お茶碗は飯粒にこびりつかれた。
ねじが錆びついた。 *釘もそうしついた。	*1項動詞
花子は太郎にしがみついた。 *次郎もそうしついた。	*太郎は花子にしがまれついた。 太郎は花子にしがみつかれた。
タバコのおおいが体に染みついた。 *煙のおいもそうしついた。	*体はタバコのおいに染みられついた。 *体はタバコのおいに染みつかれた。
子猫が親猫にしゃぶりついた。 *子犬もそうしついた。	*子猫が親猫にしゃぶられついた。 子猫が親猫にしゃぶりついた
太郎は母親にじゃれついた。 *次郎もそうしついた。	*母親は太郎にじゃれられついた。 母親は太郎にじゃれつかれた。
子犬が母犬の乳房に吸いついた。 *子猫もそうしついた。	*母犬の乳房が子犬に吸われついた。 母犬の乳房が子犬に吸いつかれた。
太郎は泣きながら母親にすがりついた。 *次郎もそうしついた。	*母親は太郎にすがられついた。 母親は太郎にすがりつかれた。
太郎は東京に10年間住みついた。 *次郎もそうしついた。	*東京は太郎に10年間住まれついた。 *東京は太郎に10年間住みつかれた。
太郎が母に抱きついた。 *次郎もそうしついた。	*母は太郎に抱かれついた。 母は太郎に抱きつかれた。
太郎は3時間後に頂上に辿りついた。 *次郎もそうしついた。	*頂上は太郎に迎られついた。 *頂上は太郎に辿りつかれた。
犬が太郎に飛びついた。 *猫も太郎にそうしついた。	*太郎は犬に飛ばれついた。 太郎は犬に飛びつかれた。
悪魔が太郎にとりついた。(=とっつく) *別の悪魔もそうしついた。	*太郎は悪魔にとられついた。 太郎は悪魔にとりつかれた。
ボートはある島に流れついた。 *船もそうしついた。	*島はボートに流れられついた。 *島はボートに流れつかれた。
太郎は父に泣きついた。 *次郎もそうしついた。	*父は太郎に泣かれついた。 父は太郎に泣きつかれた。
息子は俺に似ついた。 *娘もそうしついた。	*俺は息子に似られついた。 *俺は息子ににつかれた。
あの赤ちゃんはやと寝ついた。 *その赤ちゃんもやとそうしついた。	*あの赤ちゃんはやと寝られついた。 *あの赤ちゃんはやと寝つかれた。
太郎の足にガムが粘りついた。 *次郎の足もガムがどうしついた。	*太郎の足はガムにねばられついた。 *太郎の足はガムにねばりつかれた。
太郎は山に登りついた。	*山は太郎に登られついた。

*次郎も山にそうしつた。	*山は太郎に登りつかれた。
太郎は駅に走りつた。	*駅は太郎に走られつた。
*次郎も走りつた。	*駅は太郎に走りつかれた。
蚊が天井にはりつた。	*天井は蚊にはられつた。
*蠅もそうしつた。	*天井は蚊にはりつかれた。
太郎は花子に振るいつた。	*花子は太郎にふるわれつた。
*次郎もそうしつた。	花子は太郎にふるいつかれた。
ガムが靴底にへばりつた。	*靴底はガムにへばられつた。
*泥も机にそうしつた。	*靴底はガムにへばりつかれた。
犬が太郎に吠えつた。	*太郎は犬にほえられつた。
*猫もそうしつた。	太郎は犬にほえつかれた。
蛇がネズミに巻きつた。	*ネズミが蛇に巻かれつた。
*バラもそうしつた。	ネズミが蛇に巻きつかれた。
太郎は母にまつわりつた。(=纏いつく)	*母は太郎にまつわれつた。
*次郎もそうしつた。	母は太郎にまつわりつかれた。
努力が成功に結びつた。	*成功は努力に結ばれつた。
*実力もそうしつた。	*成功は努力に結びつかれた。
ストーブの火がカーテンに燃えつた。	*カーテンがストーブの火に燃えられつた。
*ガスレンジの火もそうしつた。	*カーテンがストーブの火に燃えつかれた。
太郎は花子の印象が頭に焼きつた。	*花子の印象が太郎の頭に焼かれつた。
*次郎もそうしつた。	*花子の印象が太郎の頭に焼きつかれた。
魚が網に焼けつた。	*網が魚にやかれつた。
*貝もそうしつた。	*網が魚にやけつかれた。
太郎は病みつた。	*1項動詞
*次郎もそうしつた。	
彼には誰も寄りつかない。	*彼は誰にも寄りつかない。
*彼女にもそうしつかない。	彼は誰にも寄りつかれない。
太郎は煙いつた。	*1項動詞
*次郎もそうしつた。	

〈付録 3〉「Vつける」の統語テスト

「そうする」への置換	「受身」可能性
1) 太郎が子供に買い物を言いつけた。 → *次郎も自分の子供にそうしつけた。	A) *買い物が太郎によって言われつけた。 → 買い物が太郎によって言いつけられた。
2) 太郎は普段から誰にでもほめ言葉を言いつけている。	B) *悪口は太郎によって言われつけている。

→次郎もそうしつづけている。 3)太郎は普段から誰にでもほめ言葉を言い慣れている。 次郎もそうし慣れている。	→悪口は太郎によって言いつけられている。 C)*悪口は太郎によって言われ慣れている。
1)太郎は犬を痛めつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は犬を痛めつけている。 →次郎もそうしつづけている。 3) 太郎は犬を痛め慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*犬は太郎にいためられつづいた。 →犬は太郎に痛めつけられた。 B)犬は太郎にいためられつづけている。 →犬は太郎に痛めつけられている。 C)犬は太郎にいためられ慣れている。 →*犬は太郎に痛め慣れられている。
1)太郎は卵を煎りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から卵を煎りつけている。 →次郎もそうしつづけている。 3)太郎は普段から卵を煎り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*卵が太郎によって煎られつづけた。 →卵が太郎によって煎りつけられた。 B)*卵は太郎によって煎られつづけている。 →卵は太郎によって煎りつけられている。 C)*卵は太郎によって煎られ慣れている。
1)太郎はプランターにトマトの苗を植えた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段からプランターにトマトの苗を植えている。 →次郎もそうしつづけている。 3)太郎は普段からプランターにトマトの苗を植え慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*トマトの苗が太郎によって植えられつづけた。 →トマトの苗が太郎によって植えつけられた。 B)*トマトの苗は太郎によって植えられつづけている。 →トマトの苗は太郎によって植えつけられている。 C)*トマトの苗は太郎によって植えられ慣れている。
1)太郎は申請書を受けつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から上司のアドバイスを受けつけている。 →次郎もそうしつづけている。 3)??太郎は普段から上司のアドバイスを受け慣れている。	A)*他人の忠告が太郎に受けられつづけた。 →他人の忠告が太郎に受けつけられた。 B)*他人の忠告は太郎に受けられつづけている。 →??他人の忠告は太郎に受けつけられている。 C)*他人の忠告は太郎に受けられ慣れている。
1)太郎は釘を柱に打ちつけた。 →*次郎も柱にそうしつけた。 2)太郎は普段から釘を打ちつけている。 →次郎も柱にそうしつづけている。 3)太郎は普段から釘を打ち慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*釘が太郎によって打たれつづけた。 →釘が太郎によって打ちつけられた。 B)*釘は太郎によって打たれつづけている。 →釘は太郎によって打ちつけられている。 C)*釘は太郎によって打たれ慣れている。
1)蛾が木の葉に卵をうみつづけた。 →*トンボも木の葉にそうしつけた。 2)蛾は木の葉に卵をうみつづけている。 →トンボも木の葉にそうしつづけている。 3)??蛾は木の葉に卵をうみ慣れている。 →??トンボもそうし慣れている。	A)*卵が木の葉にガにうまれつづけた。 →卵が木の葉にガにうみつづけられた。 B)*卵は木の葉に蛾にうまれつづけている。 →??卵は木の葉にガにうみつづけられている。 C)*卵は木の葉に蛾にうまれ慣れている。
1)太郎は花子にお酒を売りつけた。	A)*お酒は太郎によって花子に売られつづけた。

→*次郎もそうしつけた。 2) 太郎はお酒を売りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3) 太郎はお酒を売り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	→お酒は太郎によって花子に売りつけられた。 B)*お酒は太郎によって花子に売られつけている。 →お酒は太郎によって花子に売りつけられている。 C)*お酒は太郎によって売り慣れている。
1) 太郎が花子に請求書を送りつけた。 →*次郎も花子にそうしつけた。 2) 太郎は普段から誕生日には花子に花束を送りつけている。 →次郎も花子にそうしつけている。 3)??太郎は普段から誕生日には花子に花束を送り慣れている。	A)*請求書が太郎によって送られつけた。 →請求書が太郎によって送りつけられた。 B)*花束は太郎によって送られつけている。 →花束は太郎によって送りつけられている。 C)*花束は太郎によって送られ慣れている。
1) 太郎が魚を押さえつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から部下の発言を押さえつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)??太郎は普段から部下の発言を押さえ慣れている。	A)*魚が太郎によって押さえられつけた。 →魚が太郎によって押さえつけられた。 B)*部下の発言は太郎に押さえられつけている。 →部下の発言は太郎によって押さえつけられている。 C)*部下の発言は太郎に押さえられ慣れている。
1) 太郎が書類に拇印を押した。(=おっつける) →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から部下に自分の発言を押している。 →次郎もそうしつけている。 3)??太郎は普段から部下に自分の発言を押し慣れている。 2') 太郎は普段からこのボタンを押している。 3') 太郎は普段からこのボタンを押し慣れている。	A)*拇印が太郎によって書類に押されつけた。 →拇印が太郎によって書類に押しつけられた。 B)*発言は太郎によって部下に押されつけている。 →発言は太郎によって部下に押しつけられている。 C)*発言は太郎によって部下に押され慣れている。
1) 太郎が心を落ち着けた。 →*次郎も心をそうしつけた。 2)*太郎が心を落ち着けている。 →*次郎もそうしつけている。 3)??太郎は普段から心を落ち着け慣れている。	*
1) 太郎が下級生を脅しつけた。(=脅かしつける) →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から下級生を脅しつけている。 →次郎も下級生をそうしつけている。 3)??太郎は普段から下級生を脅し慣れている。	A)*下級生が太郎に脅かされつけた。 →下級生が太郎に脅しつけられた。 B)下級生は太郎に脅かされつけている。 →下級生は太郎に脅しつけられている。 C)下級生は太郎に脅かされ慣れている。
1) 太郎は外国から小麦を買いつけた。 →*次郎も外国からそうしつけた。 2) 太郎は普段から自販機でタバコを買いつけている。 →次郎もそうしつけている。 3) 太郎は普段から自販機でタバコを買い慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*小麦が太郎によって外国から買われつけた。 →小麦が太郎によって外国から買いつけられた。 B)*タバコは太郎によって外国から買われつけている。 →タバコは太郎によって外国から買いつけられている。 C)*タバコは太郎によって外国から買われ慣れている。

1)太郎は手帳に約束の日時を書きつけた。 →*次郎も手帳にをそうしつけた。 2)太郎は普段からその言葉を書きつけている。 →次郎もそうしつけている 3)太郎は普段からその言葉を書き慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*約束の日時が太郎によって書かれつけた。 →約束の日時が太郎によって書きつけられた。 B)*一週かの予定は太郎によって書かれつけている。 →一週かの予定は太郎によって書きつけられている。 C)*一週かの予定は太郎によって書かれ慣れている。
1)太郎の犬が主人のにおいを嗅ぎつけた。 →*次郎の犬もそうしつけた。 2)太郎は普段からその香りを嗅ぎつけている。 →次郎の犬もそうしつけている。 3)太郎は普段からその香りを嗅ぎ慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*主人のにおいが太郎の犬に嗅がれつけた。 →主人のにおいが太郎の犬に嗅ぎつけられた。 B)*主人のにおいは太郎の犬に嗅がれつけている。 →主人のにおいは太郎の犬に嗅ぎつけられている。 C)*主人のにおいは太郎の犬に嗅がれ慣れている。
1)太郎が火事場に駆けつけた。 →*次郎も火事場にそうしつけた。 2)??太郎は普段から高速をバイクで駆けつけている。 →??次郎も火事場にそうしつけている。 3)?太郎は普段から高速をバイクで駆け慣れている。	*³⁶
1)太郎がクリスマスツリーを飾りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)花子は普段から髪をリボンで飾りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)花子は普段から髪をリボンで飾り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*クリスマスツリーが太郎によって飾られつけた。 →クリスマスツリーが太郎によって飾りつけられた。 B)*壁は太郎によって飾られつけている。 →壁は太郎によって飾りつけられている。 C)*壁は太郎によって飾られ慣れている。
1)太郎が営業資金を貸しつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から無利子で金を貸しつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)?太郎は普段から無利子で金を貸し慣れている。	A)*営業資金が太郎によって貸されつけた。 →営業資金が太郎によって貸しつけられた。 B)*金は太郎によって貸されつけている。 →金は太郎によって貸しつけられている。 C)*金は太郎によって貸され慣れている。
1)太郎は花子に構いつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から花子に構いつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から花子に構い慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*花子は太郎に構われつけた。 →花子は太郎に構いつけられた。 B)花子は太郎に構われつけている。 →花子は太郎に構いつけられている。 C)花子は太郎に構われ慣れている。
1)太郎は木にそのロープを絡みつけた。 →*次郎も木にそうしつけた。	A)*そのロープは太郎に絡まれつけた。 →そのロープは太郎に絡みつけられた。

³⁶ 「駆けつける」が自動詞であるため、受身形は成立しない。

2)太郎は木にそのロープを絡みつけている。 →次郎も木にそうしつけている。 3)太郎は木にそのロープを絡み慣れている。 →次郎も木にそうし慣れている。	B)*そのロープは太郎に絡まれつけている。 →そのロープは太郎に絡みつけられている。 C)*そのロープは太郎に絡まれ慣れている。
1)太郎は銃声を聞きつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から銃声を聞きつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から銃声を聞き慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*銃声が太郎に聞かれつけた。 →銃声が太郎に聞きつけられた。 B)*銃声は普段から太郎に聞かれつけている。 →?銃声は普段太郎に聞きつけられている。 C)*銃声は普段から太郎に聞かれ慣れている。
1)太郎は木に歌を刻みつけた。 →*次郎も木にそうしつけた。 2)太郎は普段からキャベツを刻みつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段からキャベツを刻み慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*歌が太郎によって木に刻まれつけた。 →歌が太郎によって木に刻みつけられた。 B)*キャベツは太郎によって刻まれつけている。 →キャベツは太郎によって刻みつけられている。 C)*キャベツは太郎によって刻まれ慣れている。
1)太郎は彼を犯人と決めつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から彼を犯人と決めつけている。 →*次郎もそうしつけている。 3)*太郎は普段から〜と決め慣れている。	A)*彼が太郎に犯人と決められつけた。 →彼が犯人と太郎に決めつけられた。 B)?彼は太郎に犯人だと決められつけている。 →彼は太郎に犯人だと決めつけられている。 C)*彼は太郎に犯人だと決められ慣れている。
1)太郎は板に目印を切りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から娘の髪を切りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から娘の髪を切り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*目印が太郎によって板に切られつけた。 →目印が太郎によって板に切りつけられた。 B)*娘の髪は太郎によって板に切られつけている。 →髪は太郎によって板に切りつけられている。 C)*娘の髪は太郎によって板に切られ慣れている。
1)太郎は白いハンカチを棒の先に括りつけた。 →*次郎も棒の先にそうしつけた。 2)太郎は普段から古新聞を括りつけている。 →次郎も棒の先にそうしつけている。 3)太郎は普段から古新聞を括り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*ハンカチが太郎によって棒の先に括られつけた。 →ハンカチが太郎によって棒の先に括りつけられた。 B)*古新聞は太郎に括られつけている。 →古新聞は太郎に括りつけられている。 C)*古新聞は太郎に括られ慣れている。
1)太郎はボートを岸に漕ぎ着けた。 →*次郎も岸にそうしつけた。 2)太郎は普段からボートを漕ぎつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段からボートを漕ぎ慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*ボートが太郎によって岸に漕がれつけた。 →ボートが太郎によって岸に漕ぎつけられた。 B)*ボートは太郎によって漕がれつけている。 →ボートは太郎によって漕ぎつけられている。 C)*ボートは太郎によって漕がれ慣れている。

1)太郎は花子に理由をこじつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は花子に理由をこじつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)*太郎は花子に理由をこじなれている。	A)*理由が太郎によって花子にこじられつけた。 →理由が太郎によって花子にこじつけられた。 B)*理由が太郎によって花子にこじられつけている。 →理由が太郎によって花子にこじつけられている。 C)*理由が太郎によって花子にこじられ慣れている。
1)太郎はパレットへ絵の具を擦りつけた。 →*次郎もそうしつけた 2)太郎は普段からマッチを擦りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段からマッチを擦り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*パレットへ絵の具が太郎によって擦られつけた。 →パレットへ絵の具が太郎によって擦りつけられた。 B)*版画は太郎に擦られつけている。 →版画は太郎に擦りつけられている。 C)*版画は太郎に擦られ慣れている。
1)太郎は子供を叱りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から部下を叱りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から部下を叱り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*子供が太郎に叱られつけた。 →子供が太郎に叱りつけられた。 B)部下は太郎に叱られつけている。 →部下は太郎に叱りつけられている。 C)部下は太郎に叱られ慣れている。
1)太郎はリボンを木に縛りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から息子を柱に縛りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)? 太郎は普段から息子を柱に縛り慣れている。	A)*リボンは太郎によって木に縛られつけた。 →リボンは太郎によって木に縛りつけられた。 B)次郎は父に柱に縛られつけている。 →次郎は父に柱に縛りつけられている。 C)次郎は(父に)柱に縛られ慣れている。
1)太郎は花子の首を締めつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から硬いボルトを締めつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から硬いボルトを締め慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*花子の首が太郎に絞められつけた。 →花子の首が太郎に絞めつけられた。 B)*その硬いボルトは太郎に絞められつけている。 →その硬いボルトは太郎に絞めつけられている。 C)*その硬いボルトは太郎に絞められ慣れている。
1)太郎はタバコを吸いつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から葉巻を吸いつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から葉巻を吸い慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*タバコが太郎によって吸われつけた。 →タバコが太郎によって吸いつけられた。 B)*葉巻は太郎によって吸われつけている。 →葉巻は太郎によって吸いつけられている。 C)*葉巻は太郎によって吸われ慣れている。
1)太郎はクレーラをそこに据えつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)??太郎は普段から天井にサーバーを据えつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)??太郎は普段から天井にサーバーを据え慣れている。	A)*クレーラは太郎にそこに据えられつけた。 →クレーラはそこに太郎に据えつけられた。 B)*サーバーは天井に太郎に据えられつけている。 →クレーラは太郎に据えられつけている。 C)*サーバーは天井に太郎に据えられ慣れている。

1) 太郎は母の胸に顔を擦りつけた。 →*次郎も母の胸にそうしつけた。 2) 太郎は普段からマッチを擦りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3) 太郎は普段からマッチを擦り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*太郎の顔は母の胸に擦られつけた。 →??太郎の顔は母の胸に擦りつけられている。 B)*マッチは太郎に擦られつけている。 →?マッチは太郎に擦りつけられている。 C)*マッチは太郎に擦られつけている
1) 太郎は花子を責めつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から妻を責めつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)??太郎は普段から妻を責め慣れている。	A)*花子が太郎に責められつけた。 →花子が太郎に責めつけられた。 B)妻は太郎に責められつけている。 →妻は太郎に責めつけられている。 C)??妻は太郎に責められ慣れている³⁷。
1) 太郎は電話を備えつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から威厳を備えつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)??太郎は普段から威厳を備え慣れている。	A)*電話が太郎によって備えられつけた。 →電話が太郎によって備えつけられた。 B)*威厳は太郎に備えられつけている。 →威厳は太郎に備えつけられている。 C)*威厳は太郎に備えられ慣れている。
1) 太郎は顔料をノートに染めつけた。 →*次郎もノートにそうしつけた。 2) 太郎は普段から髪を染めつけている。 →次郎もそうしつけている。 3) 太郎は普段から髪を染め慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*顔料が太郎によってノートに染められつけた。 →顔料が太郎によってノートに染めつけられた。 B)*花子の髪は太郎に染められつけている。 →花子の髪は太郎に染めつけられている。 C)*花子の髪は太郎に染められ慣れている。
1) 太郎はかまどに火を焚きつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から焚火(たきび)を焚きつけている。 →次郎もそうしつけてる。 3) 太郎は普段から焚火を焚き慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*火が太郎によってかまどに焚かれつけた。 →火が太郎によってかまどに焚きつけられた。 B)*焚き火は太郎に焚かれつけている。 →焚き火は太郎に焚きつけられている。 C)*焚き火は太郎に焚かれ慣れている。
1) 太郎がボールを叩きつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段からドラムを叩きつけている。 →次郎もそうしつけている。 3) 太郎は普段からドラムを叩き慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*ボールが太郎によって叩かれつけた。 →ボールが太郎によって叩きつけられた。 B)*ドラムは太郎によって叩かれつけている。 →ドラムは太郎によって叩きつけられている。 C)*ドラムは太郎によって叩かれ慣れている。
1) 太郎が銃を花子の背中に突きつけた。 →*次郎も花子の背中にそうしつけた。	A)*銃が太郎によって花子の背中に突かれつけた。 →??銃が太郎によって花子の背中に突きつけられた。

³⁷ 「責める」が性的な意味で用いられる場合、「慣れる」という語と共起することは可能であるが、通常の「責める」の意味(「苦しめる」「相手の非をとがめる」)では不自然になる。

2) 太郎は普段から食事のときひじを突きつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)?? 太郎は普段から食事のときひじを突き慣れている。 2') 太郎は普段から槍を突きつけている。 3') 太郎は普段から槍を突き慣れている。	B)*ひじは太郎によって突かれつけている。 →ひじは太郎によって突かれつけている。 C)*ひじは太郎によって突かれ慣れている。
1) 日差しが地面に照りつけた。 →*日差しが地面にそうしつけた。 2) その部屋には普段から西日が照りつけている。 →*日差しが地面にそうしつけている 3)*その部屋には普段から西日が照り慣れている。	*
1) 太郎は花子を怒鳴りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から花子を怒鳴りつけている。 →次郎もそうしつけている 3)?? 太郎は普段から花子を怒鳴り慣れている。	A)*花子が太郎に怒鳴られつけた。 →花子が太郎に怒鳴りつけられた。 B) 花子は太郎に怒鳴られつけている。 →花子は太郎に怒鳴りつけられている。 C) 花子は太郎に怒鳴られ慣れている。
1) 太郎が子供をどやしつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から息子をどやしつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)?? 太郎は普段から息子をどやし慣れている。	A)*子供が太郎にどやされつけた。 →子供が太郎にどやしつけられた。 B) 太郎の息子は普段太郎にどやされつけている。 →太郎の息子は普通太郎にどやしつけられている。 C) 太郎の息子は普段太郎にどやされ慣れている。
1) 太郎は車にステレオを取りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から健康のためにたくさんの水を取りつけている。 →*次郎もそうしつけている。 3)?? 太郎は普段から健康のためにたくさんの水を取り慣れている。	A)*ステレオが太郎によって取られつけた。 →ステレオが太郎によって取りつけられた。 B)*たくさんの水は太郎に取られつけている。 →たくさんの水は太郎に取られつけている。 C)*たくさんの水は太郎に取られ慣れている。
1) 太郎はキャンパスに絵の具を殴りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から後輩を殴りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)?? 太郎は普段から後輩を殴り慣れている。	A)*キャンパスに絵の具が太郎に殴られつけた。 →キャンパスに絵の具が太郎に殴りつけられた。 B) 後輩は太郎に殴られつけている。 →後輩は太郎に殴りつけられている。 C) 後輩は太郎に殴られ慣れている。
1) 太郎はコップを床に投げつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2) 太郎は普段から変化球を投げつけている。 →次郎もそうしつけている。 3) 太郎は普段から変化球を投げ慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*コップが太郎に投げられつけた。 →コップが太郎に投げつけられた。 B)*変化球は太郎に投げられつけている。 →変化球は太郎に投げつけられている。 C)*変化球は太郎に投げられ慣れている。
1) 太郎は子供の髪を撫でつけた。	A)*子供の髪が太郎によって撫でられつけた。

→*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から子供の頭を撫でつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から子供の頭を撫で慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	→子供の髪が太郎によって撫でつけられた。 B)*子供の頭が太郎に撫でられつけている。 →子供の頭が太郎に撫でつけられている。 C)*子供の頭が太郎に撫でられ慣れている。
1)太郎は牛肉を煮つけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から筍を煮つけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から筍を煮慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*牛肉が太郎によって煮られつけた。 →牛肉が太郎によって煮つけられた。 B)*牛肉は太郎によって煮られつけている。 →牛肉は太郎によって煮つけられている。 C)*牛肉は太郎によって煮られ慣れている。
1)太郎は反対派を睨みつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段からその男を睨みつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)*太郎は普段からその男を睨み慣れている。	A)*反対派の席が太郎によって睨まれつけた。 →反対派が太郎によって睨みつけられた。 B)その男は太郎に睨まれつけている。 →その男は太郎に睨みつけられている。 C)??その男は太郎に睨まれ慣れている。
1)太郎は上着の胸にワッペンを縫いつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から和服を縫いつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から和服を縫い慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*ワッペンが太郎によって縫われつけた。 →ワッペンが太郎によって縫いつけられた。 B)*和服は太郎によって縫われつけている。 →和服は太郎によって縫いつけられている。 C)*和服は太郎によって縫われ慣れている。
1)太郎は紙に油を塗りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段からパンにオリーブオイルを塗りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段からパンにオリーブオイルを塗り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*油が太郎によって塗られつけた。 →油が太郎によって塗りつけられた。 B)*オリーブオイルは太郎によって塗られつけている。 →オリーブオイルは太郎によって塗りつけられている。 C)*オリーブオイルは太郎によって塗られ慣れている。

1)花子は子供を寝かしつけた。 →*太郎もそうしつけた。 2)花子は普段から赤ん坊を寝かしつけている。 →太郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から赤ん坊を寝かし慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*子供が花子に寝かされつけた。 →子供が花子に寝かしつけられた。 B)赤ん坊は普段から花子に寝かされつけている。 →?赤ん坊は花子に寝かしつけられている。 C)?赤ん坊は普段から花子に寝かされ慣れている³⁸。
1)太郎は外車を乗りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から外車(に)乗り付けている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から外車(に)乗り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*外車が太郎に乘られつけた。 →外車が太郎に乗りつけられた。 B)*外車は太郎に乘られつけている。 →外車は太郎に乗りつけられている。 C)*外車は太郎に乘られ慣れている。
1)太郎は車でそこに馳せつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は車でそこに馳せつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)*太郎は車でそこに馳せ慣れている。	*
1)太郎はボールを撥ねつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から雨のときズボンに泥を撥ねつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)*太郎は普段から雨のときにズボンに泥を撥ね慣れている。	A)*ボールが太郎によって撥ねられつけた。 →ボールが太郎によって撥ねつけられる。 B)*泥が太郎のズボンに撥ねられつけている。 →泥が太郎のズボンに撥ねつけられる。 C)*泥が太郎のズボンに撥ねられ慣れている。
1)太郎は壁に紙を貼りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段からサロンパスを貼りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段からサロンパスを貼り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*紙が太郎によって壁に貼られつけた。 →紙が太郎によって壁に貼りつけられた。 B)*サロンパスは太郎によって貼られつけている。 →サロンパスは太郎によって貼りつけられている。 C)*サロンパスは太郎によって貼られ慣れている。
1)太郎が花子を引きつけた。(=引っつける) →*次郎も花子をそうしつけた。 2)太郎が普段から宝くじを引きつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から宝くじを引き慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*花子が太郎に引かれつけた。 →花子が太郎に引きつけられた。 B)*弓は太郎に引かれつけている。 →弓は太郎に引きつけられている。 C)*弓は太郎に引かれ慣れている。

³⁸ 非文ではないが、「赤ん坊」に対して「慣れている」という語句を用いるのが難しいから不自然に判断される。

1)太郎は酒臭い息を花子に吹きつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段からトランペットを吹きつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段からトランペットを吹き慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*酒臭いが太郎によって吹かれつけた。 →酒臭いが太郎によって吹きつけられた。 B)*トランペットは太郎によって吹かれつけている。 →トランペットは太郎によって吹きつけられている。 C)*トランペットは太郎によって吹かれ慣れている。
1)北風が真っ向から吹きつけた。 →*吹雪が真っ向からそうしつけた。 2)普段からその窓には北風が吹きつけている。 →*吹雪が真っ向からそうしつけた。 3)*普段からその窓には北風が吹き慣れている。	*
1)太郎は箱を踏みつけた。(=踏んづける) →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段からミシンを踏みつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段からミシンを踏み慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*箱が太郎によって踏まれつけた。 →箱が太郎によって踏みつけられた。 B)*ミシンは太郎によって踏まれつけている。 →ペダルは太郎によって踏みつけられている。 C)*ミシンは太郎によって踏まれ慣れている。
1)花子は太郎を振りつけた。 →次郎もそうしつけた。 2)*花子は太郎を振りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)*花子は太郎を振り慣れている。	A)*太郎は花子に振られつけた。 →太郎は花子に振りつけられた。 B)太郎は花子に振られつけている。 →太郎は花子に振りつけられている。 C)太郎は花子に振られ慣れている。
太郎は万年筆に名前を彫りつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から仏像を彫りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から仏像を彫り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*名前が太郎によって彫られつけた。 →名前が太郎によって彫りつけられた。 B)*仏像は太郎によって彫られつけている。 →印は太郎によって彫りつけられている。 C)*仏像は太郎によって彫られ慣れている。
1)太郎は首にマフラーを巻きつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から包帯を巻きつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から包帯を巻き慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*マフラーが太郎によって巻かれつけた。 →マフラーが太郎によって巻きつけられた。 B)*包帯は太郎によって巻かれつけている。 →包帯は太郎によって巻きつけられている。 C)*包帯は太郎によって巻かれ慣れている。
1)太郎は指輪を友達に見せつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)花子は普段からそのペンダントを友達に見せつけている。	A)*指輪が太郎によって友達に見せられつけた。 →指輪が太郎によって友達に見せつけられた。 B)*テストの結果は太郎によって彼女に見せられつけている。

→葉子もそうしつけている。 3)??花子は普段からそのペンダントを友達に見せ慣れている。	→テストの結果は太郎によって彼女に見せつけられている。 C)*テストの結果は太郎によって彼女に見せられ慣れている。
1)太郎は宝石を見つけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から宝石を見つけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から宝石を見慣れている。 →次郎も普段からそうし慣れている。	A)*宝石が太郎に見られつけた。 →宝石が太郎に見つけられた。 B)*宝石は太郎に見られつけている。 →宝石は太郎に見つけられている。 C)*宝石は太郎に見られ慣れている。
1)太郎は旗を竿に結びつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から娘の頭にリボンを結びつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から娘の頭にリボンを結び慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*旗が太郎によって竿に結ばれつけた。 →旗が太郎によって竿に結びつけられた。 B)*リボンは太郎によって娘の頭に結ばれつけている。 →リボンは太郎によって娘の頭に結びつけられている。 C)*リボンは太郎によって娘の頭に結ばれ慣れている。
1)太郎は執事に食事の用意を申しつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)??その執事は普段からご主人にそう申しつけております。 →あの執事もそうしつけております。 3)??その執事は普段からご主人にそう申し慣れております。	A)*食事の用意が太郎によ25って申されつけた。 →食事の用意が太郎によって申しつけられた。 B)*食事の用意は太郎によって申されつけている。 →食事の用意は太郎によって申しつけられている。 C)*食事の用意は太郎によって申され慣れている。
1)太郎は茶碗にご飯を盛りつけた。 →*次郎も茶碗にご飯をそうしつけた。 2)太郎は普段から大皿に刺身を盛りつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から大皿に刺身を盛り慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*ご飯が太郎によって盛られつけた。 →ご飯が太郎によって盛りつけられた。 B)*花は太郎によって盛られつけている。 →花は太郎によって盛りつけられている。 C)*花は太郎によって盛られ慣れている。
1)太郎は写真を焼きつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)太郎は普段から写真を焼きつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)太郎は普段から写真を焼き慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*写真が太郎によって焼かれつけた。 →写真が太郎によって焼きつけられた。 B)*写真は太郎によって焼かれつけている。 →写真は太郎によって焼きつけられている。 C)*写真は太郎によって焼かれ慣れている。
1) 太郎はリボンを柱に結いつけた。 →*次郎もそうしつけた。 2)花子は普段から日本髪を結いつけている。 →次郎もそうしつけている。 3)花子は普段から日本髪を結い慣れている。 →次郎もそうし慣れている。	A)*リボンが太郎によって柱に結われつけた。 →リボンが太郎によって柱に結いつけられた。 B)*日本髪は太郎によって結われつけている。 →髪は太郎によって結いつけられている。 C)*日本髪は太郎によって結われ慣れている。
1)太郎はそばに花子を寄せつけた。 →*次郎もそばにそうしつけた。	A)*花子が太郎によって寄せられつけた。 →花子が太郎によって寄せつけられた。

2) 太郎は普段から変な人を寄せつけている。 → 次郎もそうしている。 3) ?? 太郎は普段から変な人を寄せ慣れている。	B) ?? 普段から変な人が太郎に寄せられつけている。 → ? 普段から変な人が太郎に寄せつけられている。 C) * 普段から変な人が太郎に寄せられ慣れている。
1) 太郎は花子呼びつけた。 → * 次郎もそうつけた。 2) 太郎は普段から次郎をガリレオと呼びつけている。 → 花子もそうしている。 3) 太郎は普段から次郎をガリレオと呼び慣れている。 → 次郎もそうし慣れている。	A) * 花子が太郎に呼ばれつけた。 → 花子が太郎に呼びつけられた。 B) 次郎は太郎にガリレオと呼ばれつけている。 → 次郎は太郎にガリレオと呼びつけられている。 C) 次郎は太郎にガリレオと呼ばれ慣れている。
1) 太郎は仕事を割りつけた。 → * 次郎もそうつけた。 2) 太郎は仕事を割りつけている。 → 次郎もそうしている。 3) * 太郎は仕事を割り慣れている。	* 仕事は他動に割られつけた。

